
トラベジウム

咲水 ゆうき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トラベジウム

【Nコード】

N 6 5 1 9 M

【作者名】

咲水 ゆつき

【あらすじ】

世界には神となる守護神がいる。聖獣四神五体の獣、蒼龍・黄龍・朱雀・玄武・白虎。・・・そして妖。

彼らの力を使う人もまた存在し穏やか、とまではいかないが有りふれた暮らしがそこにあった。

数年前に蒼紅の乱と呼ばれた争いがあった。ある少女は家族を失い、ある少年は責務を負う。それは小さな火種であったが数年後、世界を巻き込むことになるかもしれずに。

第壱幕 火傷の劔 序章 白けゆくとき（前書き）

初心者ですのでつたないところがあると思いますがよろしく願いいたします。

追記 表記の仕方が違っていたので訂正していますが、内容に変更はありません。

第壱幕 火傷の劔 序章 白けゆくとき

まだ、東の空は薄白く完全に夜が明けきれぬ頃。

人の手が付けられていないせいかな昼でも暗い森に影が一つ、奥へと進む。

その手には鈍い白銀の光を鞘に納めた刀が握られていた。

ザザ…ザ…と微かに吹く風が木の葉を揺らす。

木々が人為的に切られ開けた場所で影は動きを止め、納めていた刀を抜きその澄んだ光を解き放つ。

背後に向けて一振りすれば柄に付いている飾りが遅れて同じく空を舞う。

「出てこい。」

低めの声で影が言うところ草が何かに擦れる音が段々大きくなり、木々の間からもうひとつ影が現れた。「…。」

沈黙を保ったまま出て来た影の姿が薄明かりではあったがはっきりとする。

深い紺髪で碧眼の女…その中でも印象的なのは目で二十歳前後なのだが同年代の者に比べ何か鋭さを持っていた。ここ最近は何部族間の抗争は治まっていたはずだ。

「何…？」

困惑した表情で聞いてきたので何かと思ったが彼女をじっと見ていた事に気付く。

「あ、いや…何でもない。」

しばらくして彼女は自分に向けられている刀に視線を向け、

「何もしないわ…それ、しまってください？」

少し躊躇したが、特に悪い感情も感じられなかったので刀はしまうことにした。

あたりを見渡したが気配も音もなくいたって静かな朝だ。

ただ、彼女との遭遇・・・いや確実に後を付けて来ていたのが気になる。

「・・・俺はお前につけられる覚えがないのだが？」

こちらの隙は見せない様にして、「お前に」の部分を少し強調して問いかける。

「その必要があると思ったから、それだけよ。」

「・・・理由としては不十分だな。」

ま、自分も普段の行動がいいとは言え切れないのでそこは聞き流すことにしても、どうする？ 今までの動きからして撒こうとして追いつかれるかもしれない。

かといって尾行され続けるのも気分が悪い・・・この際面倒だから気絶させてしまおうか？

「貴方、妖族について・・・特に赤髪の妖族について何か知っていることはないかしら？」

俺が考えていると彼女は先ほどとは違った様子で聞いてきた。

尋ねるなら情報屋に聞けばいいものを・・・と思うが何よりその内容が問題だった。いくつかの部族の中で妖族は異質な存在。少数ながら最大部族である龍族と対等しうる契約獣を従えている。

帝　と名が付く異名で呼ばれ、薄い色素の髪を持ち、強いと有名だが実際に見たものは　他部族では無いに等しいと言う・・・　噂だ。妖族の長である外的特徴の一つの髪の色は異名別に違うのだが　赤髪ということは・・・。

「妖族・・・なぜそんな事を聞く？」

「・・・。」

彼女は視線をそらし、それ以上話そうとはしない。深刻な事情があるようだが

「知らないな。」

そう答えると、短く

「・・・そう。ならいいわ。」

大体の返答が同じ様なもので特に残念な素振りは見せず彼女がそれ以上聞く事はなく多くの情報を探すためだろうか 足早にその場を後にした。

彼女を見送ると彼は呟いた。

「…一人で来て正解だったな。」

近くにあった木にもたれかかり、薄く色づいた空を眺めながら彼女の言葉を思い出す。

今になって妖族を探す人物が出てきた…部族間の抗争は治まったとは言えない…？

むしろ部族内部の方が？ どちらにしても、火種は小さいうちに消した方が良い。

ようやく薄暗い森の中にも朝日が差し込み、木々の隙間からこぼれた光が彼にも当たる。

「さて、行くか。」

歩き出した彼の髪に朝日が照らされ燃える様に煌めいた。

第壱幕 火傷の劔 序章 白けゆくとき（後書き）

名前一切なしって…序章ですの。
区切りがつけば人物紹介をつくります。

一章 彷徨う風、確かな光

腑甲斐ない……今の私の状況をどう説明したらいいのだろう。

冷たい床は石で出来ているらしく、六畳程の部屋全体も同じ材質で建てられている。

倉庫として使われていたと思われる部屋に私はいた。当然扉は固く閉じられており、唯一ある小さな窓は通気口らしく鉄格子が編み目の様に組まれている。身につけているのは服だけで他には何も無い宿を出るときに一応、装備として剣を携帯していたがそれも盗られ、最悪な事に契約した神珠シンシュもない。

武器なら代わりはいくらでもあるがよりによって神珠をなくすなんて……。

ここから出れないかと考えていたが、あまりこういった経験は少なくて特に何も浮かばずどうしていいのか分からなくなり 途方に暮れ、走馬灯ではないが今日の事を思い返していた。

“噂や人の話なんてモノは曖昧で偏見や先入観が入ってて信用が出来ない”

この言葉がいつも私の事を嘲笑う様に心の中で繰り返し浮かび、進む事を躊躇して立ち止まってしまふ。今日は天気も良く出かけるのにはうってつけなのに、あの言葉が私を外に出してはくれない。

今いる場所は蒼龍族管轄区ソウリョウウツクカンカツクの中でも流通の多い街で有名な蒼景ソウケイに来たのはいいが思っていたほど情報が集まらず、もどかしい日々を過ごしていた。宿屋で部屋を取りもう四日が経とうとしていた。

「ここじゃ、ダメなのかな……。」

通りが見渡せる宿を取りその一室の窓に肘をついて何度目かのため息をついた。

近頃、昔の事や今までの事を振り返る事が多く、こうして外を見る事が増えたのもそうだし空が茜色になる頃になると決まって窓を閉め、夜になるとまた開けるといった一連の行動をする自分が“あの事”を忘れていないことを実感する。

「夕焼けは綺麗だけど、まだ…ダメなのよね。」

燃える様に赤い夕陽。赤い髪。深紅の炎。脳裏に焼き付いた色が、六年たった今でも恐怖と怒りと悲しみで心は埋め尽くされてしまう。忘れる事なんか出来ない。だから探して、探して…。

「そう…探してるんだ。あの、紅い記憶を。」
微かに唇が動く。

誰にも聞こえない程度に呟きそれまで虚ろだった瞳に光が宿ったかの様に決意を確認する。それからの行動は素早く、荷支度を済ませると露店の光が灯り始めた街へと駆けだした。

まだ、ほのかに明るい西の空には薄い月が見えたが街の明かりでそれに気付く人は少ない。

流通の街だけあって露天の数が多く人も昼とさほど変わらず、その中を私は商人や旅人を中心に聞き込みを開始する。日はとうに暮れ、街の明かりなしでは暗闇に染まる頃休憩をとるため家と家にある隙間に身を隠す様に休もうとしたその時

「あんた、“アイツ等”の情報が欲しいんだって？」

その言葉に振り向くと、後ろには商人らしき男が立っていた。いきなりだったのでうまく言葉が出せず、

「え…と、あいつらって、」

「妖族のことだよ。そうだな、立ち話もなんだから私の店に来ないか？」

私が言うよりも一瞬早く商人が答えた。特に有力な情報もなく彼の提案を断る要因がなかったため、誘いを受けその後について行った…と、ここまではよかった。

商人の経営する店に入り、案内された部屋に入るといきなり手を縛られ剣と神珠を奪われた。

その後は記憶がない事から 何か嗅がされたのだろう、そしてこの有様。縄抜けぐらいはすぐに抜けれたが、部屋からは出る事が出来なかった。

どうして気付かなかったのかと今更騒いでも状況が変わるまでもなく、再度途方に暮れようとしたその時 わずかに光が差し込んでいた通気口から小さいながらも声が聞こえる。

「……………」

その言葉の内容を聞き取ろうと息を潜める。

「こ……ら、……れも……ろ」

声に集中するが、思ったよりも外壁が厚く上手く聞き取れない。これ以上状況が悪化する事はないと考え強硬手段に出る。

「……てや……！！」

掛け声と共に通気口のある壁に向かってに勢いよく体当たりをするが、壁はヒビすら入ることもなく強硬手段はその成果を上げる事なく終わり代わりに言いようもない痛みと虚しさだけが残る。

「痛……。神珠さえあれば、こんな壁くらい……！！」

しかし、ないもはない。その場に倒れ込み、そう嘆きにも似た悔しさを聞く者はいない筈だった。

ふと、何も無いはずの部屋で顔にかかる影があることに気が付く。

「……影……？……どうし……」

疑問を口にしながら影ができる方向に顔を上げると、同年代と思われる青年が部屋の入り口近くでこちらを見ていた。彼の印象に気を捕われている場合ではないが、特徴的な前髪で中央部分だけが長い赤と白を基調とした和服装で 目立つ人物だったがその気配は無いに等しく、何より近よりがたいふいんきを持っていた。この部屋に入れる人物は限られている。反射的に身構え、狭い部屋だがその中で距離を取る。

「あいつらの仲間……！？」

「・・・・・・・・。」

しかし、返事はない。こちらの問いかけは無視した様子でその場を動かず部屋を見ている。その態度が気に入くない私は もう一度、殺気を込めて問う。

「敵なの、味方なの？」

「さあ？」

緊張感のない返答をされ、更に殺気を彼に、確実に向ける。

「いきなり殺気を向けた奴に答える義理は無い。」

「あ。」

かなり間拔けな声とともに顔をしていたに違いないが、そんな事はおいとくとして、敵ではないと判断した私は現状把握のため彼に聞きたい事があった。

「さきの事は謝るわ。貴方に聞きたい事があるのだけれど、いいかしら？」

「聞いてれば、な。」

多少引つかかる返事だったが、他に打開策が見つからない今、私はこれまでの経緯を簡単に話すことにした。ここがどこであるか、どうして閉じ込められる事になったのか彼らが何者かであるのかなどを聞いた。

「その話が事実ならここは、あんたを誘った商人の倉庫だ。少し街から離れてはいるがな。」

あいつらは大雑把に言うところブローカーってところか。」

「ブローカーって何の？」

「このご時世で高く売れるって言えば、神珠しかないだろう？」

当然の様に言うが彼だが、私には思いもよらない事実だった。

「神珠なんか売れる物なの？」

「普通の契約者：“力”が欲しいなら、売らないだろうな。それ以外なら話は別ってことだ。」

いくら停戦状態といっても小規模な争いはあるし、部族の上層部は次の政に明け暮れてる状態。」

「…たくさんの、それに強大な契約獣の力！」

「そういうこと。お前が何を探してるかなんて興味ないが、次は用心しろ。」

無愛想だけど結構優しい所もあるんだあ…それよりも重要なことが彼の話から分かった。ここの商人らが違法行為をしている事に。この世界の柱である聖獣との契約をかわした証・神珠は聖獣の力を借りる媒体であり、借宿でもある。

そしてそれは絶大な力を生み出す。そのことから神珠は重要な物とされており、神珠が原因で部族抗争や内部紛争が起こる事がしばしばあった。その事から最近では売買が禁止事項とされている。そして軍に組する私がやる事は一つ。

「よし、行動開始ね！」

「な、何をするつもりだ…？」

「何って、取り締まるのよ！カモにしたのが軍人だった事が運の尽きよ。」

と誇らしげに話す、そもそも盗られた事がばれるとヤバイ。腰にいつも携帯している剣と掴んだ…つもりだったが、虚しくも何無く手は空を切り同時に叫ぶ。

「…って剣盗られてるんだった！！…どうしよう。」

この最悪であろう現状にため息をつくが、ふとある事に気がつく。彼がこの場所にいる理由を知らない。正直言ってこんな辺鄙な倉庫に来ること自体がおかしいし、ましてやここの関係者ならこんなに警戒心がないのもそうだ。

「ところで貴方、彼らに用事があるのよね？」

私は目の前にいる彼に自分の推測を述べる様に話しかけるとその意図が分かったのか顔を顰めた。

「…おい、ついでに「助けて」なんて思っていないだろうな？確かにあいつらに用はあるが、お前に用はない。」

「…それなら話が早いわ！お願い、あいつらから剣と神珠が戻るまで！！ね？」

「断る。」

「…自分の事は自分でするし、貴方の用事も手伝うから！」

「いらん。」

「…せめてここから出すくらいはいいでしょ？」

「……………分かったから黙ってくれ。」

この際プライドは捨てる覚悟で彼に言い寄る。藁にもすがる思いで引き止めたかいがあつたのか、渋々ではあるがとりあえず 協力をしてもらえる事となつた。

「他の事はしないから…。」

念押しに言われたが、そんな事は気にせずこの倉庫から出る事の方が優先事項だ。でもその前にまだ聞いてない事があつた。

「あ、そうそう、どう呼んだらいいかな？」

突然の問いに一瞬戸惑っていたが短く答えてくれた。

「名か？ノゾミだ。どう呼んでもらってもかまわない。」

「私はサキミヤ・ツアクロー。サキでもいいわよ。」

相変わらず事務的な会話だが、お互いの事に触れた瞬間でもあつた。

二章 永久なる者

街を照らしていた露店の明かりは消え、ほとんどの建物からは明かりを見る事はない。人々は眠りにつく時刻になっていた。微かに残っていた薄い月も沈みただ、鈍い暗闇が広がる。その闇の中、先きほど出会った二人はある場所へと向かっている。

一人は、深い赤錆色の髪で特徴的な前髪をしていた。ノゾミと名乗った青年は二十歳前に見える。

その後ろを歩くのは同じ時年頃であろう女性は紺色の髪に飾りを付けており、耳元には金のピアスが光る。あまり飾らないシンプルな装飾と青い服に合わせたことから彼女、サキミヤの好みが伺える。

「ところで、心当たりがあるの？」

少し歩くスピードを上げ、彼の隣へ寄る。こちらを振り返る事も無く、

「……一応は。」

「ふーん……」

曖昧な返答。期待はしていなかったし、あの場所にいたのは理由が在るのは確かなので深く聞くのはやめる事にした。元々、私は他人には干渉しない主義だし。

と心の中で呟くサキミヤ。それ以降会話もなく静かに歩む。倉庫として使われていた建物から街へ来るのにはさほど時間はかからなかった。

「問題はこれからね。」

街のメインストリートまでさしかかったとき会話が再開する。

「あの商人、表向きは外交商をしているがその裏で神珠^{シンシュ}を密輸しているようだ。」

「え、調べてあるの？」

彼に失礼なのだが意外な情報の調べに驚きを隠せない。その事に気を悪くしたのか進むスピードをあげ

「さつさと神珠を取りに行くぞ。」

「ちょ、と待つてよ。」

会って間もないが、あまり感情を出さない彼が少し不機嫌そうに言う。とノゾミはそそくさと彼女を置いて先に行く。普通の反応に親近感を感じたのか、微笑ましく思えて彼には悪いが心の中でクスリと密かに笑う。気がつけば彼とはかなり離れておりサキミヤは少し駆け足でその後を追った。

ノゾミが案内したのは宿屋のあった大道りから少し離れ、隠れた名店などというたい文句が付きそうな場所にあり外交系の商店か貿易商と言った類いの店で表の方は既に明かりはなく、至って静かだった。

「ここが、あの商人の店だ。…入るぞ。」

着いて早々に踏み込もうとする彼を慌てて止めにノゾミの前に立った。

「あ、待つて！いくら何でも、正面からじゃ無理よ！…せめて裏口とか、上から侵入できる箇所はないの？」

勢いはあるものの刻限が遅い事もあり、サキミヤは小声で叫んだ。
が、

「ない。」

即答で返された一言でその心配と苦労は無駄に終わる。最近、努力の割に報われていない…そんな愚痴をこぼしながら彼女はノゾミの後に続いて正面扉から家宅侵入する事となった。

商店の扉には鍵がかかっていたが、ノゾミが少し鍵穴を調べると簡単な仕掛けらしく呆気無く開かれた。

見渡して見ると 至って普通の店で商品がショウケースに並び、カウンターの奥の方に配置されておりその近くに商談で使われている

のか机と 椅子が二セットあるだけ。内装もシンプルなもので、何処が描かれているのかは分からないが所々に風景画が飾られていた。
「ここが表向き^{カモフラージュ}の店なのね。」

「奥に行ける筈だ。」

率直な感想を言うサキミヤに対してノゾミは話がそれない内に本来の目的を探すように促した。特に返事もしないまま二人は各々別れて周囲をくまなく調べる。

「隠し扉とかそんな仕掛け^{トラップ}でもあるのかしら…？」

期待と好奇心に満ちた彼女の台詞に

「あつても困る。」

「…夢がない。退屈なんだからこのくらい遊んだっていいじゃない。」

「……。」

どうやら彼女にとって搜索作業は退屈や興味が無い物の部類に入らしく、素っ気ない彼に真面目過ぎ！と思うサキミヤ。 実際問題としてこの場合無い方が好ましいという事は彼女も理解はしているが、地味な作業がかなり嫌いなのだ。さほど広くない店内を調べるのにも時間はかからなかったが、それらしいものは見つからない。
「次の部屋に期待をするか。」

そう言つてノゾミはカウンターの奥にある“関係者以外立ち入り禁止”と書かれたドアに手をかけた。

「…なんだここは。」

部屋に入るとその場所には家具や荷物といった人が生活する上で必要な道具が無く、そこは暗闇の静けさと空虚があるだけで。

「どうしたの？何か… ぎゃー！」

サキミヤがノゾミの異変に気付いて駆け寄り部屋に入ると体勢を崩してしまい、前にいたノゾミにぶつかってしまふ。

「う、…いきなり押すな…早く退け。」

サキミヤか覆いかぶさるように倒れた為、ノゾミは下敷きになった状態で少し苦しそうにしており慌てて彼から離れる。

「ご、ごんなさいっ　！つて今、背中を押された　！！…誰か…いた？」

「…気配はないな。」

悪徳商人に捕まる間抜けな奴だが何もない所でつまずく剣士など居ない。確証はないが直感的に感じたから間違いないだろう…この部屋も何か様子がおかしい。ノゾミはこれまでの事を整理して考えていたが答えが出てこない。

「何もなさすぎる。…お前はと思う？」

「え？ん…気配がない奴に、空っぽも部屋…。」

キーワードを並べて考えるが思いつかない。心当たりがない事を返事をしようと思った時、ある事を思い出す。

「一つだけ…普通なら可能性は低いけど…ある。」

「もしかすると…か？」

「ええ、でもそうなると厄介だわ…クオン。」

誰とも分らない名を心配を含んだ声で紡ぐサキミヤは悲しいとも苦しいとも言えない表情を浮かべていた。彼女にとって今の状況は厳しい…今の私でもう一度向き合う事が出来るだろうか…？自信が無いわけではないが不安に駆られる。

というのも、この異様な空間…虚無は未契約の神珠がある場合におこる現象だった。そして未契約になった神珠こそサキミヤが商人に盗られてしまったモノ。

彼女が剣を手に取った時神珠と契約をしたが今、破られ白紙の状態になっている。恐らくブローカー達は売り捌く為にどういった経緯でその術を得たのか不明だが契約の破棄が出来る術を知っているのだ。

「行く。元々、私のせいだし。」

決意をこめた言葉は彼女が前に進む事だけを考えているという事が伺えた。

「異論は無い。…言霊^{コトダマ}はなんだ？」

「言霊　？」

慣れない単語に思わず聞き返してしまう。話の流れからおおよその見当はついていたが、ノゾミは不思議そうに尋ねてきた。

「あれは言霊 とは呼ばないのか？」

「ん、私の部族では祝詞^{ノリト} って呼んでたわよ？ 神珠の獣：聖獣を呼び起こす呪文みたいなものだし、部族間で呼び方が違ってるみたいね。…信仰している聖獣が部族で違う事を考えたら必然なのかも。」

ま、神珠の契約なんて個人でする事が多いし人がいる前じゃないもんよね。と心の中で付け足しておく。

「さて、そろそろ行かないとヤバいかな？」

そう言つて、眼と閉じて精神を集中させると両手で 印（イン）を組む。印 は彼らの世界に一時的だが干渉する為の扉で、先の

言霊 や 祝詞 は扉を開く為の鍵の役割を果たしている。

ただ、開くと言つても“彼ら”と“人”の時がほんの一瞬交わるだけであつて、それ以上もそれ以下も出来ないのだが 契約 を交わすには十分。静かに息を整えて言葉を紡ぐ。

「永久^{トウ}の汝に、刹那の我らと重なる時を。」

言い終わると同時に、ぐにやりと周りの空間が歪み始め、一種の無重力感が襲い平衡感覚を狂わされる。そして辛うじて天と地が分かる何も無い世界に二人は立っていた。

「相変変わらず何も無い所ね。…彼の方から来てくれる筈よ。」

ここへは一度来た事があるサキミヤはこの殺風景さにもう一度ため息をつく。一方、ノゾミは多少興味があると言つた感じで 周囲を観察しているようだった。確かに何も無い世界だが、ひとつだけ例外があつた。

「これが本体か？」

二人がいる場所からさほど離れていない所に二メートル程の淡く光を放つ琥珀色の岩を差しながらノゾミはサキミヤに聞いた。

「あゝ…だと思つわ。…たぶん。前に 契約 しに来た時はそんな余裕が無かつたし。」

自信無く話す彼女にもう一つ疑問があつたのかまたノゾミが口を開く。

ホタルイシ

「蛍石^{ホタルイシ}：お前、龍^{ケンゾク}の眷属^{ケンゾク}の者か？」

「あ、うん。」

そこで会話は終わってしまい暫し静寂が流れた。

…貴女方が？私の領域に介する“ヒト”。

空間全体から響く澄んだ声。しかし、冷たく鋭い声でもあった。サキミヤはぎこちなく彼の名を呼んだ。

「・・・クオン。」

私の名は久遠^{クオン}。“龍”に属する者、何用か。

「再度…契約を申したい。」

……ならば証を。

それつきり声は聞こえなくなり、また何も無い世界に戻ってしまう。しかし、サキミヤは唯一ある蛍石の前に立ち目を閉じて 深呼吸をすると双剣を取り出すと胸の前に掲げて小さく呟く。

「わたしの証は 我は、汝と共に生きる者。…劔^{シルギ}を証として捧げる。」

淡かった蛍石の光が強くなり世界自体を覆うほどに光以外のものが見えなくなる。光の中サキミヤはその紡いだ意味を確かめていた。

劔、戦いに力を使うという事…これでいい。あの時も今もこの想いは変わっていないから。

再び目を開けると自分たちの世界に、商人の店の中にある部屋に戻っていた。

「じゃあな。」

戻ったとたんにノゾミはそう言うのと部屋をようとするが、入り口に差し掛かった時その歩みを止める。不思議に思ったサキミやは彼に歩み寄りながら嫌味を含みながら尋ねた。

「行くんじゃないかったの？」

「…のつもりだった、が。」

いつも異常に歯切れが悪い言い方をするノゾミ。

「何？心変わり？」

「ではないが、この人数は一人では厳しいかと。」

促されるまま商人の店先に目をやるとそこには数えるのも嫌になる人数が立ちはだかつていた。もちろん全てあの商人の護衛や雇われた傭兵なのだろう。

「うん。…初めて意見が合ったかも。」

素早く二人は構え、剣に手を添える。その気配を察知した同時に傭兵も構え、いつ終わるか分からない睨合い。

「薄い所は？」

「左方。」

ノゾミの返答を合図にして二人は夜を駆けた。

二章 永久なる者（後書き）

この話のイメージソングがあったり。アジカンの「旅立つ君へ」…最後の歌詞がサキミヤにぴったり。^。^ノ
気がつけばこの話を立ち上げてから6年くらいたってたりします。
放置期間長すぎワインでもあるまいに…。

三章 闘わぬ戦士の詩

夜が明けるまでに二人は商人の雇った傭兵を振り切りつた後、蒼龍^{ソウリウ}族管轄区^{ウツクカンカツク}の蒼景^{ソウケイ}から街道沿いに西へと向かった。途中に小さな休憩場所となっている場所で休息を取ることにした。

「誇らしげに咲く花は世界に羽ばたき・・・常夜を映す水面^{もなも}は瞬き忘れた月を揺らして幾つもの夢を渡る貴方を探している・・・」
詞は幾時の世界の物語を語り、時には真実をも紡ぐ。その為、吟遊詩人や語り手と呼ばれる者達は影と闘いながら生きている。それが弱く幼い者でも例外はない。

「・・・危険が伴うと知りながらもそれを選ぶのか。」

囁く様な歌声を聞きながら、赤錆色の髪を持つ青年ノゾミは呟く。彼の色素の薄い瞳の視界の端には歌声の主が映っていた。こげ茶色の髪は肩より少し下で所々に長く伸びた場所がありはつきり言って不揃いだ。服装は一般的な物ではなく衣装という印象を受ける。閉じられている瞳の色は分からなかったが十代半ばの少女だった。

「危険だつて分かっているだけマシじゃない？」

独り言にまさか自分の返事が帰って来たので少し目を開き、驚いてしまった。少し後ろで休んでいたサキミヤは少しバツが悪そうに言葉が続けた。

「私が言うのもおかしいけどね。・・・ちょっと提案があるんだけどいい？」

「提案？」

「うん。私が蒼龍族の軍に属しているって事は気付いてると思う。その軍本部まで付き合っただけで欲しいの。」

「・・・は？」

ノゾミは思わず間抜けな声を出してしまった。この女なんと言った？蒼景では商人から神珠と剣を取り戻すだけと言うことで協力したのに図々しくも蒼龍族の軍本部・・・つまり蒼琳院^{ソウリンイン}まで付き合え

と！？

「もちろん、タダでなんて言わないわ！」

サキミヤの必死の説得が続いているがノゾミの答えは決まっていた。
「断る。」

いつまでも他の部族と関わるのは正直な所、避けたい。例え、戦い慣れた者とは言え連れていると何かと動きづらい。今回はたまたまあの商人が”ハズレ”だったから余計な詮索もなかったし無事に済んだ。この辺りが潮時だな・・・ここで釘を刺しておけば今は後を追ってくることもない・・・あれを追ってるならば会うかもしれないが。

「俺はお前ほど暇じゃない。それに・・・あれには関わらない方がいい。」

「なにそれ。」

「お互いの為だ。」

先ほどの表情と打って変わって不機嫌になるサキミヤ。そんな彼女を置いてノゾミは無言で腰を上げて歩き出すので止めようと彼の後を追う様に立ち上がる。

「ちよつと、どこ行くのよ！？」

今までの観察コウテウからある程度予測はしていたが・・・予想以上にしつこい女だ。これ以上付いて来ない様にしなければ。

「関わるな。」

突然、席を立ったノゾミを止めようとするサキミヤだったが彼は聞かずにそのまま歩き出す。今まで一人では成果が上げれない事を悩んでいたのが協力者が欲しいと考えていたサキミヤは当然追いかけてようとしたが、追いかけれなかった。

「・・・ッ。」

彼の発する威圧だけで動けなかった・・・手さえも。格上だという事は会った時の行動から読み取れたがこんなにも力の差があるとは思わなかった。しかも、神珠の力を使わずに、だ。

僅かな時間の交わりは暁とともに終わりを告げ、新たなる光は混沌

の世界を覆う闇を濃くするだけだった。

夜明けに伴い休憩所を発つ人が増え残る者は少ない。その中、一人で立ちすくむ人が気になって声をかけることにした。

「どうされたのですか？」

鳥のさえずりの様な声をしたのをぼんやりとした頭で聞いた。

「どこか怪我をされましたか？」

二度目で自分に言われていることだとサキミヤは気が付くと、慌てて返事を返す。

「え？あ、なんでもないのっ！」

「本当ですか？」

「大丈夫よ！ほんとに！！」

念押しに三度も聞かれたと思うと相当な時間ぼーとしていた様で急に恥ずかしくなり、少し顔を赤らめながら言うのと納得したのか、ニコリと微笑んで座りませんか？と言ったので二人向かい合う形でその場に腰を下ろした。

「あの、すいません。突然話しかけたりして・・・来られた時にもう一方といった様に見えたのですが、先ほどから見かけなくなつたのですから・・・。」

サキミヤに話しかけて来たのは休憩所に来た時に語り詩を紡いでいた幼さが残る少女だった。

「あ、僕はリヨウ、リヨウ・ハクサンポウと申します。見ての通り語り手をしています。」

小さく未熟者ですが・・・と付け足してはにかんで言う。

「私はサキミヤ。サキって呼んでもらって結構よ？」

サキミヤはあえて自分の氏と職業は伏せておく。何処からどう情報

が漏れるか分からないのだ。例え若い語り手でも……。

「では、サキさん。連れの方はどうされたのですか？」

「あゝ、それなんだけど、仲間とかそういうのじゃないから気にしなくていいよ？」

濁した様にいうとリヨウは失礼なことをしたと思い、頬染めて俯いてか細い声で謝った。

「すみません、要らぬことお聞きして……。」

「だから気にしないでいいって。でも、心配してくれたんでしょ？ ありがと。」

「あ、はい。」

そこで、サキミヤは思い出したかの様にリヨウに問いかけた。

「そうだ！ 語り手って各地を渡り歩いてるんでしょ？ 妖族……赤い髪の妖族を見たり、聞いたことってある？」

期待のまなざしで返事を待つサキミヤにリヨウは記憶をたどっているのか少し考えて

「ごめんなさい、僕はまだ駆け出しの吟遊詩人なので蒼龍の管轄から出たことがなくて……赤い髪の妖族は聞いたことはありません。」

「そっ……か。」

「そ、の、本当にすいません！」

サキミヤの落胆の声に罪悪感を感じたのかリヨウはまた頭を下げた。

「あ、いいの！ 変に期待した私が悪かったし……ごめん。それとありがと……そろそろ行くわ。」

「いえ、お気をつけて。」

別れを告げサキミヤは立ち上がってその場を去ろうとした時、不思議な旋律が聞こえた……様な気がした。

『その力を恐れるな龍を従えしヒトよ。紅き帝は慈悲深き者ぞ。』

薄明かりが世界に広がり声は風とともに溶け、誰一人としてその声の主を知ることはいできない。

三章 闘わぬ戦士の詩（後書き）

実は今回出てきたリヨウですが、物語の作ることになったきっかけは彼女です。

最初はメインに入れようとおもったのですが話を肉付けするうちにメインから離れちゃいましたが・・・ネタバレしそうなのでこの辺で。

四章 残る傷跡

蒼景より街道沿いに西へ進んでいたサキミヤは木陰で少し休憩する事にしたが、休憩所で十分とは休めていないので眠りが 彼女を誘う。今いる蒼龍族管轄地域の南西部は春めいた心地よい風が吹いている。

その日はいい天気だった。

その日はいい天気だった。良く晴れており風が少し乾いていた。

「今日は東の草原に行ってくるね！お母さん。」

元気に少女はこれから出かける事を母に伝える。このやり取りは日常らしく母親は微笑んで答えた。

「あまり遅くならない様にね？この前は」

「分かってるもん！ちゃんと最後の礼の鐘が鳴る頃には帰ってくるよ！」

「本当？」

「ホント！いつてきます！」

ちよつとムキになってはいるが嬉しそうに少女は言い返して出かけて行く。

「ふふ、貴方に認められたいのね？あの子。」

微笑んだまま母親は壁にかけた短剣に話かけたが剣は答えず静かにそこに在った。

少女が言った東の草原とは彼女の家から言葉道りに東にあるなだらかな丘のある草原で少女は毎日晴れた日には 武術の稽古をしてい

た。

「お前、今日もやるのか？」

「！」

少女の他に東の草原ではこの近くの村の男やその子供が剣や武術の稽古の為集まってくるが、小さな少女の姿は一人だけ。

「あ、たりまえでしょ！花を摘みに来たわけじゃないわ。」

「ふーん。」

声をかけて来たのは少女と同じか少し上の少年で最近になって手合わせをしているので顔見知りになり顔を見れば挨拶する程度だけだが。同じ村には居ないから余所の村の子供だろうと少女は思っている。

「今日は勝ってやるんだから！」

意気込む少女を少年は不思議そうに見てから、尋ねる。

「なあ、」

「なに？」

「女なのに何でそんなに稽古したがるんだ？女って村中で稽古じゃない事とかやってんじゃねーの？」

「それは…そう、だけど。」

大体の村では家事や家畜の世話などをやっていたり遊んだり稽古に参加する少女は居ない、彼女を除いては。

「じゃあ、なんで？」

「なんでって、それは…。」

少女は心に秘めた決心を言えずに俯く。言えるわけない…兄さんの神珠シンシュに選ばれたいからだなんて！っていうか女の子らしくないし…。

それよりも！きちんとた挨拶もしていない相手に言う必要なんてないわっ！

「それは、あんたにカンケーないでしょ！」

「関係あるね。疾風シッポウのスワロウの血縁だろ？」

前にお母さんから聞いた話して疾風シッポウのスワロウは兄さんの通り名で

その素早い剣捌きからそう付いたって。村の外に知っている人がいるのは初めてだったから目を見開いてそいつの顔を見たらなんかすごく飽きられた。

「　　ったくどんだけ箱に入れてんだよ？スワロウのヤツ…。」

「箱？」

「なんでもでもねえよ。…手合わせ、やるんだろ？」

なんか話が見えないけど取りあえず気が済んだみたいだから手合わせを始めるらしいので礼をして型をとる。

「参る！」

あたしの得物は短剣や双剣と言ったあまり力の要らない刃物。体術も合わせているから純粋な型ではないけれど　素早さを生かしたトリッキーさが売り。尊敬している兄さんと同じ型だから自慢なんだよね。　朝の稽古も終わり昼の礼の鐘が三回があたりに響き手合わせていた少年とともに昼食をとっているときだった。

ピイイイイ

招集をかける鳥笛の音が東の草原に響く。

「何：？」

周囲にいた大人達も音の発生した方向を確認した後向き声を荒げて叫ぶ。

「妖族の奴らだ…おい、村に戻れっ！」

各部族において妖族は敵視される事が多い。この周辺の村も例外ではないようだ。　訓練の指導していた大人達はその手に剣を持ちそれぞれ村に戻って行くが　子供達は集まり周囲を警戒しその場にとどまる。　争いの中でまだ訓練中の未熟者が孤立する事はつまり死を意味する。

「俺達も集まるぞ　！ここじやいい的だぜ。」

「わかった…　！あれ？」

「…どうした？」

「燃える匂い…？」

「なに？どこも燃えちゃいねえ…いや、微かにするな。風向きから言えば西の方か？」

「西…村の方？！お母さん！！！」

そう言う少女はいてもたってもいられず走り出す。それを少年は止めようとするが少女はすでに遠く小さくなっていた。

「待て、お前1人じゃ…くそつ。」

少年は少女を追いかけ彼女の村にきたはずだったがそこには煙が燻りまだ揺らめく炎が残る。何かが在ったはずの広場に着いた。

「おい、どこだ？！」

パキパキと燃え尽きた木を踏み、煙で視界が霞む。黒と赤が占める景色の中で青色の少女を見つける。

「おい…！！」

声をかけようとしたが少女が佇んでいる足下には何かが燃えた後があり。その隙間には僅かに燃えずに残った剣が見える。

「なんで？何も、何もしないのに…！！」

嘆く少女にかける言葉が見つからず少年はただ、全てを見ていたはずの空はいつもと変わらず。穏やかに流れている雲を見ているしか無かった。

眺めていた空が赤く染まり日が落る頃、少女がポツリと呟いた。

「赤い髪の男…。」

「う…。」

頬をなでる風が冷たくなりサキミヤは目を覚ます。

「……最悪。」

あんまり思いださない様にしていたが時折夢に見てしまつ。あの日、

彼女の日常は変わりそして始ったとも言える…今、軍に属している事も、剣を手に行っているのも 全てはあの時に見た赤い妖族を探し出し仇を討つ事を目標に行っている。

霞む夕闇の向こうに目印となる光があると信じて。

四章 残る傷跡（後書き）

次回は本編に戻ります。

五章 飛び立つ鳥が引く枷

「フルーバード、青い鳥、ですね？」

蒼琳ソウリンまで後少しと言う所で呼び止められる。

「…そうだけど。」

「これを。本部からの辞令書です。」

そう渡されたのは一通の文。青い鳥フルーバードとは軍に置けるサキミヤの名前。

髪が紺色で主に派遣をしているのでそう呼ばれている。

「彼の場所にて奇怪を対処されたし…？」

「今回は貴方一人に割り当てられている任務ですが協力者がいます。その者は蒼碧ソウヘキにある宿に来る様に伝えてありますので詳しい話は協力者に聞いてください。」

「…わかったわ。」

そう返答すれば文を持って来た人物・・・蒼龍の軍人はさつさとその場と立ち去る。単独の辞令書は稀だ。サキミヤの所属部署は諜報隊に属するが平部員なのでこういったものはもつと経験を積んだ者がする事が多い。疑問に思う所が多過ぎてなんともいえないが、近辺に部員がいなかったのかもしれない。

「蒼碧か…あんまりいい話を聞かない街だったような。」

蒼碧の街は鉱脈がある街で賑わっているのはいるが、信憑性ゴシツない話が多いのである。

「始祖龍伝説とか興味ないから詳しくないんだよね。」

蒼碧に着いたサキミヤは指示された街の宿に向かう。そこにいたのは漆黒の髪に切れ長の目をした落ちついた青年だった。

「君が蒼龍軍の者か？」

「そういうあなたは協力者ってことね。私はサキミヤ・ツアクロー

よ。」

「私は他の者よりタク氏と呼ばれている。」

本名を名乗らないって……この人誰かに追われているとか？怪しいけど軍が素性の分からない者を寄越すはずないし……まあ、訳アリってことね。

「早速で悪いけど、案内頼めるかしら？」

「そうだな。詳しい事は歩きながらでもしよう。」

宿に大きな荷物……といってもサキミヤもタク氏もないようなのでそのまま目的の場所へと向かう事にした。

「さて、どこから話そうか？」

「そうね……この際最初からお願するわ。」

「わかった。始めに事件が起こったのは十年も前から起こっていたようだが、気にする程度の物ではなかったから蒼碧の人も大事だとは思ってはいなかった。調査を行った者の話しによると人ではないモノが神珠シンシュの力を使用していると言う事が判明した。最近になってから頻繁に起こっているようでつい先月犠牲者が出てしまった。」

……。」

「こういった事例は少ない訳ではないが……未契約の神珠が動植物に作用するのは珍しい。次元を繋ぐ方法は人が創ったものとされるのが一般論だからな。それに移動するケースも異例だ。元々は洞穴の奥にいたが周辺の森でも目撃されている。」

「え、動くの？」

「ああ。といっても街道に出る事は無いそうだ。もう一つ、この辺りは双龍の伝説が有名だろう？だから余計に不審な輩も集まっていて対処に困っている、と言うのが現状だな。」

大体の話を聞いてやる事は分かったがいまいち正体が掴みづらい。「とりあえず、未契約の神珠を何とかすればいいってことよね？」

「簡約に言えばそうなるが問題はそこより……」

「まだあるの？」

「恐らくこの噂を聞きつけた者だと思っただが近くで不審人物が目

撃されている。」

「それってかなり問題じゃ…？」

「いや、ないな。ただ同時に相手をするのは不利だなと思ってな。」

「大した自信：頼もしいかぎりね。」

事情を聞いている間に目的の洞窟にたどり着いた。

「…で、移動しちゃうってことはどこにいるか分かんないのよね？」

「特定のパターンで行動しているようだから動いて探すより待ち伏せていた方が良さそうだ。」

パキリ。

「タク氏、この音…！」

「…音？」

どこかで何かが崩れる音が聞こえるがタク氏には聞こえていない様であつた。

「結界が崩れる音、この近くよ…！」

「貴女は神珠と契約を…？それに感知能力オラクルを持つてたのか。」

タク氏は素直に驚き、関心した。通常の生活をする上で神珠が必要かと問われればは、必要はない。また、武道に携わる者でも神珠は誰しもが持つている訳ではない。権力者、富豪、略奪者などそれは多岐に 渡るが決して神珠を手に入れるだけではその真価を見いだす事は出来ないのである。

神珠に宿る聖獣ケンソクの眷属に認められてこそ適格者であり、その力を引き出す事が出来るのだ。他にも条件があるのだがそれを含めても神珠を扱える人間は限られてくる。だから同じ使い手として感心していたのだが今は思考を捕われている暇がないようだ。

前方にある暗い穴：洞窟の奥から唸る声がこだまし大気を震わす。

「噂をすれば影っていうか大当たりって所かしら？」

「そのようだな…先ほど聞いたと言う音の正体はこの辺りに張って

あつた拘束の結界が 耐えきれなくなつたのか。」

「…出てくるわ。」

洞窟の中は光が入らない所為か唸る声の主は影になつておりよく見えない。 徐々に声の主は日に当たる場所へ動けばその姿が日に照らされ獣が何なのかが露になる。 神珠が憑いていたのは動物：熊であつた。

「まさか本当に人以外に神珠が反応するのか。」

「これ…引きはがすのってどうすればいい？」

この話を聞いた時から抱いていた疑問をタク氏に聞いてみた。

「人の様に自我があれば引き離す事は可能だろう。しかしこういつたケースでは対象を沈黙させるのが得策だと思うが？」

「…つまり殺すのね。」

「致し方が無いだろう…対象を見つけたんだ片付けるぞ。」

「分かつたわ。わたしが前に出るからフォローよろしくつ。」

そう言うときサキミヤは駆け出しその獣の懐に入り勢いのまま打ち上げる。その衝撃で後ろに飛ばされるが体勢を整える間にタク氏が気術で追い打ちをかけ、獣は衝撃で倒れ込む。

「次で仕留める。アイツの足を止めていてくれ！」

先ほど放つた雷撃より大きな術を使うのかすぐに集中するタク氏。「手短にね！」

それを受けてサキミヤは倒れ込んだ獣が再び起きる前に今度は上段から剣を叩き込む。

唸る獣にサキミヤは闘っている最中だが気を取られる。

理由も無く、ただ殺す。 何もしていないのに？不運にもとり憑かれてしまっただけ…。 一瞬の迷いがサキミヤに隙が生み、振り払われた腕に弾かれ、2、3m横に飛んでしまふが再度獣に向おうと顔を上げる。しかし後方で術を発動しようとしていたタク氏の目の前まで獣が迫っていた。彼は集中しているため獣に気付かない。

「避けっ…！」

回避をタク氏に促すサキミヤだったが間に合わない！そう思った。

しかしタク氏と獣の間に割って入る影。その影に見覚えのあるサ
キミヤはその名を呼ぶ。

「っ…ノゾミ？！」

「おまえは…。」

一瞬ではあったが行動を共にした彼がそこに居た。

五章 飛び立つ鳥が引く枷（後書き）

新キャラ登場。RPGでいえば最初のボスみたいな感じです。

各話のタイトルですが意図せずとも合ったものになったのでちゃんと棚からぼた餅です。最初のプロットの段階では新キャラが一人で出てくる予定でした。

（別キャラ視点ってな感じで。）そういえばタク氏の姿をきちんと描写してないですね・・・あれ？

第六章 双頭の龍

サキミヤの任務の最中に現れたのは 蒼景ソウケイの街で会った赤錆色の髪
の青年。タク氏と獣の間に入り刀で獣の手を押しつけるが、それ
だけだ。

「…何者だ？軍の増援と言う訳ではなさそうだが？」

サキミヤが知っているという事は蒼龍軍の者かと思ったが蒼龍族で
すらないようだ。蒼龍族は好んで金の装飾を身につける習慣があ
り彼はそういった類いを身につけていない、とタク氏は割り込んだ
人物を見る。

「前に少し…たまたま一緒に行動しただけでほとんど知らない。」

実力者だっという事と何か探しているっていうことくらいだし…
と前のときの会話を思い出そうとするが 会話自体が少な過ぎて情
報が少ないのでサキミヤは何も知らないも同然であつた事を知る。
ノゾミはというと獣との間合いを取りつつサキミヤに話しかける。

「おい、気をそらせる。…片をつける。」

「何であんたが仕切つてんのよ？…って聞いてないし。しょうがな
いわね、タク氏も援護してくれる？」

「ああ、もとよりそのつもりだ…任せておけ。」

その言葉が合図の様にそれぞれ行動に移る。サキミヤはノゾミが
攻撃する方向と違う箇所に攻撃をして獣の気をそらして相手の的を
絞らせない様に、後方でタク氏は先ほど中断してしまった術をもう
一度唱える。

「…2人とも離れてくれ！汝を滅する炎よ降り注げ火炎隕石」
フレイムフォール

獣を中心に空から火の玉が降りその身を焦がし焼き尽すそして後に
残ったのは焼けた匂いと光る神珠シンシュ。

その光景は昔見たモノと似ていた。

「火・・・。」

「…サキミヤどうかしたのか？」

その手は微かに震え声も上擦って消える様だった。が確かに火、とそう紡ぐ。

「…へい、き。匂いが…鼻についただけよ。」

「そうか？…確かにあまり好ましくない匂いだが、仕留めるには炎撃の術の方が確実だったものでな。」

術にも幾つか種類がありその用途により部類が分けられ火、水、木、土、金が五大要素と呼ばれ他の要素より強い力が得られる。神珠の場合はさらに個体を持つ要素で威力が変わる事が多く得意要素が限りなく扱いやすくなる。特に気術を攻撃の要としている神珠を持つ者、気術師と呼ばれる者達はその要素を中心に力を取得し使いこなす努力をするのである。

「これで完了ね。」

「この神珠はどうする？これは…龍の眷属ケンソクだな。」

焼け跡から拾った神珠を見てノゾミが2人に問いかける。

「私が預かっていかしら？龍ならば軍に一度預けないといけないから。」

「それで異論はない。」

「決まりね。」

結論が出たためノゾミは神珠をサキミヤに渡すが一言言っておかなければいけない事がある。

「なくすなよ。」

「わ、かってるわよ！それよりなんでノゾミは蒼碧ソウヘキにいるの？私より先に出たはずよね？」

知り合ったきっかけが神珠の紛失だったのだのもりながら神珠を受け取る。サキミヤは話をそらしたいのと、純粹な疑問から蒼碧にいる理由を尋ねる。

「ここは伝承があるからな。」

「意外にそういうの気にするんだ？」

我が道って気がしたから意外といえはタク氏がそれをたしなめる。
「…伝承とは言えサキミヤ、神珠や神獣の原点ではあるから使い手なら知っておくものだ。」

「そんな事言っても知ってなくても使えるじゃない。一般常識くらいは知っているわよ？」

「それは表面的な力に過ぎん。神髄とは理を知ってこそ習得出来ると言うもの。」

「タク氏は知ってるの？」

「…まあそれなりには、な。」

「どうでもいい会話は済んだか？…この辺りの伝承は双龍伝説、つまり始龍シリユウの話になる。」

遙か昔、聖獣はひとつの龍で在ったと伝えられている。二つの頭、二つの尾、一对の翼、鋭い牙を持ち理の全てを守る龍。その名は。

「太夜タヨ」

タク氏はノゾミが話した伝承で思い当たる名前を答える。ノゾミが話した物語は本を読めば書いてある。しかしその本は早々に手に入る代物ではない、とだけ言っておこう。

「その名を知っているのか。」

「古文書を集めるのが趣味で少し…な。」

ずれてもいないのに眼鏡を上げ隠すかの様にその目は反らされその介入を拒む。この話については誰も詳しい内容が出ないと判断するとノゾミは話しを変えることにした。

「それよりも…また獲物が一緒だとは。」

「ちよつと、そのいかにも嫌そうな口ぶりは？こっちも好んで一緒に目的にしてる訳無いでしょ！」

「あたりまえだ。：サキミヤお前は蒼琳院ソウリンインにいくのか？」
「そうよ。」

蒼琳院は蒼龍族の主都であり王族や軍事的な政が集まる。今回の任務の報告も踏まえ 諜報員としての報告もありすぐにサキミヤは蒼琳院に向かうつもりでいた。

「ついて行つてやる。」

「…はあ ? なんで今更…。」

一度ノゾミはその返事を断っていたが今度は了承すると言う。

「気が変わった。龍の事は龍の方が詳しいからな。」

「何それ・・・まあ、一緒に行つてくれるのならいいけど。」

「ならば私も同行してかまわないだろうか ?」

「え、タク氏も ?」

「いや、無理にとは言わないが…私も蒼琳院に用事があるのでな。」

「そうだったの? 多い方が安全だし全然かまわないわ。」

一度サキミヤとタク氏が落ち合う場所になっていた宿に戻りその日は日が落ちかけていた為 休んでから翌日の早朝に蒼碧を出る三人の後ろ姿があった。

七章 見えぬ空

蒼碧^{ソウヘキ}を旅立った三人だった。蒼碧は蒼龍族管轄区の中でも主要街道から離れた場所にある。目的の蒼琳院^{ソウリンイン}に行くためには主要街道に出なければならぬがもう1つ問題もあった。

「ここって本当に辺鄙^{ヘンビ}な所にあつたのね。」

「鉾山で生計を立てている街だ。そうなければどうしても奥地になるのは仕方ない事だ。」

サキミヤは改めてそう感じた事を口にしたが、タク氏もそう思う所はあるものの、街の成り立ちを考えれば納得なので何も言わずにいる。

「…声が響く。喋るのならもう少し考えろ。」

「何よ、偉そくに。…黙つとけばいいんでしょ！」

ノゾミがそう言うのには理由があるので文句を言いつつも喋るのを控える。

というのも、彼がいる場所は蒼碧から主要街道に出るための道なのだがその道は洞窟の中。必然的に悪路で狭いし視界も悪い。それでもタク氏の気術の応用で暗がり歩かずには済んでいたが、もしも野党なんかに見つかった場合に立ち回りが厄介なので身を潜めて進んでいる訳である。

「しかし、あまり人が使っている形跡が少ない…何か他に理由があったりするのではないか？」

「野党以外についてこと？この辺はそんなに物騒だなんて聞いてないわよ？」

またノゾミに怒られるのが面倒になったふたりは小声で話す。この道を教えてもらったのは蒼碧の人間だったのだが教えてくれる時に少々拳動がおかしかったので引かかってはいたのだがあまりにも情報がないために野党以外の要素を思いつかなかつたので結局は時間が惜しかったためこの悪路を通る事にしたのである。

「人以外なら魔物だろ。」

と、小声に話していたのにしっかりとふたりの話を聞いていたノゾミがそう付け加えた。

「…また神珠^{シンシュ}絡みだつたら面倒事どころか厄日よっ。」

軍に属する者ならば大なり小なり手柄を立てようとする傾向があったので神珠が集めれるのを厄介事と称した サキミヤはどちらかと言えば珍しい。

「手柄が増えるのではないかな？ サキミヤとしては。」

「じよ、冗談はよして…私、一応は諜報部の所属だし戦闘向きじゃないの。」

なら何故その獲物が剣なのか？と聞くのは踏み込み過ぎだろうとタク氏はこの話切ろうと考えていると、

「黙れ。」

一斉に三人は周囲を見渡す。先頭にいたノゾミが警戒するように先の暗闇に目を向けるが気配はない。

コツコツコツ…コツ…

「足音…？ いや、これは石が転げる時の音では…」

ないかな？と続けようとしたタク氏だったが言うより早く三人は異変を感じ2mほど後方に下がる。砂埃ですこし視界を遮られたがすぐにそれもおさまり先ほどまでいた場所には岩が壁のように通路を塞いでいた。

「な、何この岩？」

「これでは先に進めないな。」

彼等の前に塞がる岩。

「…この中で黄龍に近いものはいるかな？」

「な、なんで黄龍？」

タク氏はこの中で黄龍族の者がいないか声をかけたがサキミヤは意味が分からず疑問を口にする。

「黄龍は天に位置し、天よりその大地を司つかさどりし者：だからだろ。」

「サキミヤ、こういうのは武芸者として基本なのだが：まあそれは置いてだ。黄龍族が契約する神珠は大体地属性をベースに持っているからそれに関する事象に対して長けている事が多い。つまりこの岩を何とかできるかもしれない：という事だ。」

「実際はもう少し複雑なのだが、かいつまんで話すと各部族によって得意な属性がある、という内容だったのだがサキミヤは関心している様子から知らなかった様だ。」

「じゃあ：私が何とかできるってこと？」

「ん？サキミヤは黄龍なのか？確か蒼龍軍に属していたのでは：？」

部族と言うのは部族同士の繋がりを重んじる傾向があり軍となれば忠誠心や信頼で行動を共にする集団となれば尚更である。それに蒼龍と黄龍は同じ龍族だが、その確執は遙か昔よりあると言われるほど深いとタク氏は聞いていたためサキミヤの部族は、てっきり軍が属する蒼龍だと思っていたのだが：。

「それは、まあ色々あって：それよりこの岩、何とかしなきゃ先に行けないんですよ？」

「話は後だ。岩を壊すのが先だ。」

ノゾミが先を急ぐ様に会話に割り込む。と言うのも洞窟の内部は基本的に空気の流れが少ない事が多く、今通っている洞窟は出口と入り口の高低差があるため空気の流れがある方だったのだが岩に塞がれてしまったはその流れはないも同然。必然的に早々に来た道を戻るか岩を何とかする事の二択しかない。ここで長話をしている時間はないのだ。

「それもそうか：サキミヤ、では頼む。」

「頼む、って：どうすればいいの？私、気術得意じゃないんだけど：。」

タク氏に頼まれたサキミヤだが自信なさげに答えたのを見てため息をついたノゾミが動く。

「…お前の神珠に力を借りればいいだけの事だ。」

「え？久遠^{クオン}に？…てえ！？」

変な声をだすサキミヤの手を掴み通路を塞ぐ岩に押し付けノゾミは神珠に力を借りると言った。それを見てタク氏はノゾミの行動の意味を理解した。

「契約神珠作用か…！」

「サキミヤが気術使えなくとも神珠自体は力を使えるからな。」

相変わらず言葉が理解できていないサキミヤだったがノゾミが言った言葉でその意味は理解した…と言うよりも昔、兄に聞いた話を思い出した。

神珠が100%の力を持っていたとしても人がその力を利用しようとするとしても余計な動作や思考が入ってしまい100%の力を出す事は不可能近いと言われている。しかし、そこに人が関与しなければ神珠は本来の力を発揮する事が出来る。

しかしそれはただの力の放出であって制御出来ない力である事が多いので頼らない方がいいとも言っていた。

「ちょ、それってあぶな…！」

思い出したサキミヤは危険な行動である事に気が付き声を上げたが既に遅く力は解放されてしまった。

「？！」

しかし力を解放したと言うのに衝撃が来ない。衝撃に備えようと閉じていた目をゆっくり開ける。サキミヤが見たのはさらさらと舞う砂。よく見れば足下にも砂で覆われていた。

「…あれ、岩が割れるんじゃないの？」

「割れたと言うのは表現が違うな…砕かれたの方が正しいと思うのだが。」

いつも疑問にはすぐに答えていたタク氏も少々疑問が残っているようで推測な部分があるようだ。

「風化。…この神珠の名は時間に属する久遠。石の時間を早めただけだ。」

ノゾミがそう答えた。

「なるほど、いくら大岩といえど時間に対しての耐久は高くはない
…とうことか。」

対象物に対しての関係において攻撃や温度など多様な接触アフローチの仕方があるがその中でも取り分けて別格なのが時間である。時を前にしてほとんどの物質は弱い。

「別に…前にこの神珠の名を知っていただけだ。」

「ともかく！これで進めるわけね？」

なんだか小難しい事になりそうだったのでサキミヤは会話は終わ리
と言う意味を込めて 先に進める事を確認する。

「いくらか時間を取った事には変わらないのだから急ぐとしよう。」

タク氏がそう言えば三人は岩が塞いでいた先へと進む。 洞窟を

出る頃には日が傾き始めていたが運がいい事に蒼琳院まですぐの場
所に 出口は繋がっていたのですぐに街に着く事ができたがその日
は短時間で移動した事もありすぐに宿を取って一晩休むことにした。

サキミヤは蒼龍軍本部…街の中央にある本宮と呼ばれる場所へ向
かう事になるが他の2人も詳しく蒼琳院に知らない為案内がてらつ
いて行く事になった。

最後尾にいたタク氏が2人の事をジッと観察するように見ていたの
は本人以外知らない。

七章 見えぬ空（後書き）

一話あたりの容量を見てみると結構バラつきが・・・。

八章 氷の正義

翌朝、サキミヤに案内してもらい蒼琳院ソウリンインに入る。サキミヤよれば軍関係者の了承があれば蒼琳院の内部もある程度見て回れる。そんなので報告をするついでに許可を貰いに彼女の報告について行く事になった。

「ようこそ。…私は貴方達を招いたつもりはないのだけれど。」

「貴方達は…誰、ですか？」

開かれた扉の向こうにいたのはいつもの人物ではなく見知らぬ人物で、その事に驚きサキミヤはたどたどしく話しかける。1人は女性で白に紫の模様が入った和服装で、烏羽色の髪を後ろで2つに分け三つ編みにしており、歳は20代ほどでその物腰から礼儀正しい事が分かる。

その後ろにもう1人いて傭兵と思われる男性が控えており、和服装なのだが、羽織っているだけの様で手が隠れている。深緑の長髪を左右違った高さで纏められていた。

「申し遅れました、私はレエスと申します。こちらはキノセです。」言葉使いもさることながら丁寧に一礼して自己紹介をする2人。慣れた様にタク氏は一礼を返し、

「ご丁寧にも、私はタク氏と呼ばれております。早速で申し訳ないのですがレエス殿、面会を御願いしたいのですがコウセン代表はいらっしゃいますか？」

「申し訳ありません。コウセン代表はもういませんわ。」

期待していた返答ではなかった。引っかかる言い方に彼は再度聞き返す。

「もう…と、申されますと？」

「その…先日、御亡くなりになりました…私がその後任を務めさして頂いていますの。」

「死ん…だ？コウセン代表が？」

サキミヤは声を詰まらせてその言葉を繰り返した。：先月、謁見したときにはそんな素振りは一つもなかったし病気も患ってもいなかった。そんなの信じられない、有り得ない。と言った様に。

「ええ、ですからお話があれば私が代理、として聞きますわ。」

「そうですか：残念です。せつかくの旅行が無駄足になってしまいましたよ。」

タク氏は露骨に言ったのだが、どちらが残念なのか分からない。しかし、少し考えてから気分を変えたいように、

「さて、本題に移ってもよろしいですか？ 私達は：正確には、私は代表と対談したい事がありまして。代表の全権を引き継いでおられるようなので、貴女にお尋ねしたらよろしいのですね？」

「もちろんお聞きいたしますわ、朱雀部族長タクレイア殿？」
レエスはタク氏をそう呼んだ。

「族長　！？タク氏が？」

その前の事に気を取られていたサキミヤだったが、今度の事にも驚き声を上げた。後ろで聞いていたノゾミもさすがに驚きを隠せなかった様で、会話に参加していた。

「朱雀の、族長がこんなところまで来るほどの事なのか？」

「いや、：休暇のついでに条約でも結べればと思つてな。」

簡単な理由にノゾミとサキミヤの二人は呆れたと言つた表情をしていたが、彼女はそうは思つていなかった。

「貴重な時間は、無駄にはしたくありませんものね。どのような条約をお望みかしら？」

「平たく言えば友好条約だな。今後、他部族への進行や攻撃をしないで欲しい。」

「：思つた通り。馬鹿な注文をつけてきたわね。」
この会話から彼女の、レエスから発せられる気配が一変した事を感じ、ピンと張りつめた空気になると同時に寒気とプレッシャーが3人にのしかかる。

「っ　！！　この威圧感、あの人が　？！」

「案外早く本性を出しましたね…。私の予想が正しければ代表は、彼女達の手で亡き者に…。」

嫌な予感や予測程よく当たるものだ…タクレイアは心の中で思う。

「そうそう、貴女に話しておく事があったわ。」

レエスはサキミヤを差しながら言うが、当然ながら本人にはそんな覚えなど、到底ありはしない。

「私…に？」

「そうよ、これまで妖族について調べていたようにだけど、その任務は意味がなくなったの。だから、これ以上調べなくていいわ。…それと貴女は自由にしていいいわ。」

言葉の意味に少々理解が追いつかなかったが、わかりやすい言葉で聞き返す。

「用済みってこと？」

「噛み砕けばそうなるかしら。この後の任務もないわ。」

「それは、どういう…？」

「サキミヤ、下がれ。」

タクレイアが会話に割り込み二人の間に立つ。警戒した面持ちで、

「友好条約が出来ないと言うならば、どうするつもりだ？」

「簡単な事ですよ、族長。」

レエスがにこりと微笑むとそれまで後ろに控えていたキノセと呼ばれた傭兵が前に出で来る。

「こうするつもりです。」

その言葉が終わるか否か、キノセがタクレイアに飛びかかる。その手には羽織で隠れていたのか、くの字型のブーメランとも短剣とも取れる武器が握られていた。幾分彼らに分があるせいか反応が遅れ、剣を構えるよりも早く刃が迫ってきた。

「つく　　！！」

キーンッ

鋼と鋼が擦れあう音が広い部屋にこだます。目を閉じて痛みを受け最悪死をも覚悟していたがその痛みは永遠にこなかった。すぐさまその事に気がついたタクレイアの目の前にはノゾミが剣を抜き、キノセが繰り出した鋭い一撃を受け止めていた。

「………済まない。」

「そう思うなら気を抜くな。」

淡々とした返事だが、彼が庇ってくれた事に感謝してもしきれないほどで、タクレイアは俯く。キノセを退け払いチン、と刀を鞘に納めながらノゾミは元いた場所に戻る一方、ほっとした様子でタクレイアを見ていたサキミヤは怒りをあらわに

「いきなり切りかかるなんて！それに、代表も……！！覚悟なさい……！！」

抑えられない感情が、彼女の体を動かす。それを見たタクレイアは制止しようと手を伸ばす。

「サキミヤ？！　　ば、やめっ……！！」

しかし、それと同時にサキミヤは跳ね飛ばされる様に戻って来た。当然自分からではなく、キノセに返り討ちにあったのだ。

「もう少し考えて行動したほうがいいわよ？……そうね、どうせだから貴女達も誘おうかしら。」

くすくすと微かに漏れる笑いをやめてレエスが、サキミヤの行動を見て何か思いついたようだった。

「いいのか？………こんなのをに入れて。」

それまで無言だったキノセが彼女の思いつきに疑問をぶつけた。

「大丈夫よ。今までの記録を見ても戦力的には問題ないし、問題があるとするれば彼女達に合意の意思があるかどうかね。」

どうしても駄目なら始末してもらっただけだし。とその目が語っていた。

「………」

納得したのか、黙ったまま彼女の後ろに控える。レエスの話が全く読めないので質問をするタクレイア。

「私達にも分かる様に話してもらいたいのだが？」

「あら、ごめんなさいね。至極簡単なことよ？統一国家を作ろうっていう計画なの。参加する気はない？」

「今の部族同士の統治に何か不満でもあるの？」

“統一国家”と聞いてサキミヤは今の状態でもいい、という思いがある。レエスはそれに対して、

「不満というよりは、部族同士での戦争はなくなるし、なにより同族で分かれていること自体おかしいと思わない？」

確かに彼女の言うことは道理に合っており、部族で分かれているものの本質的には同種の生物なのだ。いつからか別れて暮らす様になり、独自に文化を築いて来た。でも、分からない。今の暮らしに何が不満なの？

「どうして今更、そんな事を？」

「今に始まった事でもないわ。争いを失くしたい、それだけよ？でも、何かを成し遂げるには力は必要不可欠な物だし、犠牲だつて仕方ない物なの。」

さらりと言うレエスにサキミヤとタクレイヤは怒りとも哀しみとも言えない感情が込み上げてくる。だからといって代表を、むやみに他者を殺してもいい理由になんかならない。決して相容れぬ存在だと気付いた二人。彼女らの少し後ろにいたノゾミはいつもと同じ関心のない様子で黙っている様に見えた。

「返事を聞かせてもらってもいいかしら？」

「ええ。」

「ああ。」

二人はお互い同時に答えを返し武器を構える。その二人の行動が理解できないようにレエスは少し苛立った様子で、

「…なんのつもり？」

「私達は、貴女とは違うんです。」

「統一国家なんていう幻想に付き合っていられないと言うことだ。」

「…わかったわ。永遠に眠りなさい。」

そう区切りをつける様に言うと、レエスは何もない所から透き通る氷の大鎌を出すとすぐに高く構え、勢いよく振り下ろす。当然、鎌からの衝撃波がノゾミ達の方へ走ったが、三人は散開して避ける。しかし、どうも様子がおかしい。ただの衝撃波なら容易に避けられる事は撃った本人なら分かっている筈。ところが追撃が未だにないとう事は？

戸惑う彼らを嘲笑うかの様にレエスは笑みを崩さずに言葉を続けながら右耳のピアスを外す。

「…永遠を意味し水を司る永帝^{エイテイ}、それが私の珠称^{シュンヨウ}。」
レエスの髪は深藍色から透ける様な空色へと変わる。妖族の帝の位を持つ者は総じて髪と瞳の色素が薄くなり、その証となる。

「汝に永久の時を与えん…我が望むは白の荒野。零侯氷原^{ゴールドフィールド}。」
詩を語る様に詠う。するとレエスの周囲から熱が奪われ、吐く息が透明から確実な白へと変わる。状況の悪化と危険を察知し、サキミヤとタク氏の二人はすぐにその部屋から出るため扉のある後ろへ駆け出すが、急激に氷点下まで気温が下がった室内は霧が発生し視界が悪く三人はそれぞれの姿を確認する事が出来なかった。

それに加えて元々滑りがいい床が凍り始めているせいか、気を緩めるとすぐに滑ってしまいそうになる。先程までいた広間の部屋に続く階段を降りて来たところでサキミヤはノゾミの姿ないに気付くと、側にいたタク氏にそれを伝えたが、彼は冷静だった。

「この視界だ、方向を間違ったのだろうな。だが、彼なら心配ない。…それに案外私たちよりも先に降りているかもしれない。」

「そう、ね。」

…確かに。彼は他人に対して関心は低いけど誰かに心配させるような事はしない。

（アイツなら大丈夫、きっと。）

サキミヤは振り返る事なく走り続けた。二人はその会話以降、下に降りるまで一言も言葉を交わすことはなかった。

一方その頃、ノゾミはまだあの広間でレエスと名乗った妖族の永帝とキノセと呼ばれた男性の傭兵と向かい合っていた。珍しくノゾミの方から会話が始まる。

「好きにすればよい、“私”は干渉せぬ。」

いつもと違った固い口調。しかし、相変わらず興味のなさそうに言い放つ。

「そう…そうでしょうね。どうして貴方が彼女達と共に行動をするのかしら？」

投げかけられた疑問にノゾミは、またも珍しくはつきりと顔をしかめた。それとは裏腹に彼女の口元は微笑んでいる。

しばしの沈黙が部屋を覆う。ノゾミは目を閉じてから声には出さないが何かを囁くと彼の周りの氷が解け始める。それは次第に広がり、いつしか部屋は埋め尽くされた氷に代わり水浸しになっていた。しかしその水は徐々に湯気が立ち最後には蒸発してゆく。

「我らと相容れぬだけ。」

「今はね。次はどうなるか分からないわよ？」

「…。」

ノゾミはその言葉には答えなかった。その代わりに彼を中心に段々と部屋は炎に包まれ始める。その炎は勢いを増して舞を演じる様に周囲に飛び散り彼の姿を書き消し、後に残ったのは残る炎と頬を焦がす熱風だけだった。

「深追いはしない方がいいわ。」

ノゾミの後を追いかけようとしたキノセはレエスに止められ、声の主に率直な疑問を聞く。

「なぜだ。アイツは、強いのだろう？」

「ええ、貴方よりも…ね。」

帰って来た返答に不満なのか舌打ちをして黙り込む。その姿は先ほどの荒々しい様子からは想像できない程、彼の態度は至って静かなものだった。

床が焦げる独特の臭いが漂う中、レエスはその炎を見て愛しそうに微笑んでいた。

八章 氷の正義（後書き）

実は1話と2話目ができた後に書いたのがこの8話。なので一番話が進みます。

巻幕で一番最初に浮かんだのがこのシーンなので思い入れはあるけど戦闘シーンが

へちよくてすいません^。^；

終章 明日を迎える場所へ

それまでいた建物の中央入口にある少し開けた場所にサキミヤとタク氏。もといタクレイアは息を切らして休んでいた。同時にもう1人いるはぐれてしまった人物を待っていた。先刻の強敵の攻撃を受け、危険を感じて逃げてきたのだが落ち合う場所を指定しなかったため心配していたがはぐれた人物、ノゾミは彼等たちの考えを察したのか同じ場所にやって来た。

「…どうやら全員無事のような。」

そう確認したのはタクレイアだったが、続けてサキミヤは不安を告げる。

「無事なのはいいけど、これからどうするの？」

「どう…とは？」

「タク氏は族長だからいいけど、私は帰る場所がないし…それに、命がないかもしれない…のよ？」

聞かれたタクレイアはサキミヤのいつも強気な彼女にしては覇氣のない声になっていた様子に、

「族長だからといってそんな保証はないと思うが？…しかし、あのレエスと名乗った人物をこのまま放つて置けないな。」

前者は気休めの言葉だが、後者は深刻な事態になっていると考えていた。

その名を聞きサキミヤはレエスの印象を感じたまま言った。

「統一国家…あの女性、かなりの実力者だよ。あんなに危険だと思つたのは…二度目かな。」

「確か…エイティ永帝エイティと言ったか。…妖族の長を相手にするのは分が悪すぎる。」

自分たちが置かれた状況がいかに不利な事を確認するが、これと言った打開策が見つからない。しばしその場に沈黙が流れたが、

「とりあえず、スザク朱雀の管轄区に移動した方が良い。」

静寂を破ったのは他でもなくタクレイアの言葉だった。

「え、どうして朱雀に？」

「とにかくここから離れないと追っ手がくるやもしれん。忘れたのか？ 族長である私の融通が利く。そこで休息と今後どうするかを考えよう。」

サキミヤの問いかけに彼は最善と思われる行動を提案した。今の状態が長く続くのは避けたいし、何より追っ手が自分たちより強い可能性が高いのだ。

「そうね、異論はないわ。…ノゾミは？」

「……。」

「…ノゾミ？」

「……。」

「ねえ。」

「……。」

「ちよつと聞いてるの！？」

すぐ傍で話しかけているにも関わらず返事をしないノゾミに耐えきれず、腰に手を当て耳元に顔を近づけてサキミヤは怒鳴るとやっ
と気がついたかのように彼は返事を返した。

「っ！…！…考え事をしていた。で、何だ？」

「もう！ぼーつとしてる場合じゃないでしょ！この後すぐにでも朱雀に行くけど文句、ないわよね？」

「…ああ。」

サキミヤが有無を言わせぬ形で聞いていたが、それもどうやら上の空らしい。この様子にタクレイアは珍しい事があるものと内心
思っていた。事の重要さに再び頭が痛くなるのを感じたが現実的に
考えると自分たちには余裕がない。

「最短の朱雀管轄区に入るまでもここからだと通常ならば6日も
かかってしまう。すぐにでも発った方がいいだろう。」

「そんなに？善は急げと言うし、急ぎましょー！」

そう言って二人はタクレイアが治める領地を目指す、移動手段は

街に着かないとどうにもならない為そこまで歩く事になる。急いでいるのか、いつにもなく早い足取りで前に行く二人から遅れてノゾミは考えながら歩いていった。

「『どうして、』か。どうして…だろうな。」

彼女との別れ際に問われたその言葉。その意味は分かっているが、自分の事なのにどうも分からない事が多かった。いや、自分の事だから余計分からないのだろうか？ 考えれば考える程に疑問と矛盾ばかりが増えてなかなか收拾がつかない。

「今はまだいいか？」

悪循環する思考を振り払うかの様に言った問いかけに誰も答えてはくれない。恐らく同行するあの二人でさえ答えてはくれない だろう…まだ、何も告げてはいないのだから。

まだ日は高く足下に出来た影を見やると今は小さいが、次第に傾く日につられて膨らむように覆うかのように伸びていく。このまま月もない闇夜に逃げてしまえば影の色は消えてくれるだろうか？

そんな事を思いながらかれは少し離れた位置から二人の後ろを見つめながら明日に進んでいく。たとえそれが自分の意志に関わらずとも。

第壱幕：火傷の劔／完。

終章 明日を迎える場所へ（後書き）

これにて巻幕終了です。

ここまでの人物紹介をまた入れときます。

ここまではある程度書いてましたので定期的に更新してましたがこの先はまだ執筆中ですので更新がまちまちになりますので先に言っ
ときます…。

登場人物 其の一（前書き）

ここまで登場したキャラクターをまとめました。

登場人物 其の一

登場人物紹介

ノゾミ・リ・フォンレ

男・18歳

血液型：O型

部族：不明

珠称：不明

何かを探して大陸を旅している青年。

前髪の一部が長く、赤錆色の髪で色素の薄い灰色の目を持つ。
戦闘は刀を使う。気術は使えるかは不明。

サキミヤ・ツアクロー

女・19歳

血液型：A型

部族：黄龍族

珠称：黄龍

蒼龍軍の諜報部に所属する軍人で軍での呼び名は青^{ブルー}い鳥^{バード}。
赤い髪を持つ妖族を探している。

濃紺色の髪に藍色の瞳を持ち、金の装飾をしている。

戦闘は双剣、または短剣を使う。気術はまったく使えない。

タクレイア・タアラソア（八章まではタク氏）

男・26歳

部族：朱雀族

珠称：朱雀

朱雀族長を若くして務める。不穏な動きの蒼龍族に条約を結びに来

ていた。

黒髪に黒色の瞳を持ち、目が悪いのか眼鏡をかけている。
戦闘は仕込み剣。気術も使えるオールマイティー型。

リヨウ・ハクサンポウ

女・16歳

血液型・O型

部族：不明

語り手をしている少女。

こげ茶の髪で長さは肩に付くくらいで深緑の瞳を持つ。

レエス・ジュンリホウ

女・21歳

血液型：B型

種族：妖族

珠称：永帝

大陸にいる部族の統一を謀る女性。

妖族の中でも水を操る永帝である部族長。

鳩羽色の髪を後ろで二つにわけて三つ編みにしており蜜色の瞳を持つ。

戦闘は背丈と同じくらいの大鎌を使うが、主に気術を使う。

キノセ・テロイヤル

男・25歳

血液型：O型

種族：蒼龍族

珠称：蒼龍

レエスに雇われた傭兵。

深緑髪で山吹色の瞳を持つ。

戦闘はくの字型のブーメランのような短剣を使う。気術は使えるか不明。

余談ですが、題名のトラベジウムは漢字で書けば四重星。オリオン座の中央部にあるM42星雲の中心部にある若い星の集まりのことです。

（明かりのない場所なら肉眼でも見えます。）

第貳幕 翼葉の楯 序章 昨日を見送る場所

本宮から離れ、蒼琳院ソウリンインの街外れに着くと街をよく知っているサキミヤが朱雀スザクまで走ってくれる馬車を探しに別行動をし、その間ノゾミとタクレイアは彼女が指定した宿を取りにいふ事となった。さほど込み合っておらず宿はすぐに取れたのでサキミヤが来るのを二人は待つだけだったので宿の部屋で自由に使っていた。

ノゾミは今までの事を思い出していた。蒼龍管轄区に入ってから様々な事があつたが恐らく彼女との再会が今までと違う流れに踏み込んだ、そんな気がする。確かなのはレエスとは違う考えを持っているという事だけで他は曖昧で珍しく迷っていた。

「二人とも、馬車が明日に出てくれるそうよ！」

ドアを勢いよく開けて、明るく声を発したのはサキミヤであつた。

「そうか……！ 思ったより早く着きそうだ、急いで支度をしなければ。」

普段はあまり感情を出さないタクレイアだが、安堵した様子で次の行動を起こす。あの出来事は数時間前の事で未だに緊張が解けないままであつたが、微かな光を見つけようと二人は積極的だった。

「……留守をしてやるから行ってこい。」

相変わらず上から目線の言い方だったがノゾミの気の利いた意外な一言に驚きを隠せない。

「え、いいの？ 別に時間はかかる程の事じゃないし……。」

「俺は特に用事がないだけだ。」

「なら、遠慮なくそうさせて貰おう。私は文を出さねばならないしな。」

「……ノゾミがいいなら構わないけど。」

そう言つて二人は部屋から出て行つた。しばらくして頼杖について窓の外をぼんやり見ると陽は傾き始めており夕刻に近かつた。その薄い赤色に思考はまた悪循環を繰り返すが、人が往来する中に見知

った人影がちらつく。

「あれは…。」

再度目を凝らして見たが、その影は人の流れにまぎれたのかいなくなっていた。見覚えのある姿に一瞬、動揺したのと同時に嬉しさと不安が押し寄せ影に語るように思わず言葉が漏れる。

「なぜ、こんな所にいる　？お前は…。」

今、この顔を見たら二人はなんと言うだろうか？いつも愛想がない表情が多い彼の感情のまま動いていた。隠しきれないほどに影の存在は彼にとって予想外なものだったのだが、サキミヤとタクレイアその二人が帰って来る頃にはいつもと変わらぬ無愛想なノゾミに戻っていた。

第貳幕 翼葉の楯 序章 昨日を見送る場所で（後書き）

盆休みの間に少し進めました。

クーラー壊れてたので扇風機常時運転でやってます。元よりクーラー使うより扇風機派ですので無問題。室温平均32・・・意外と慣れますよね、水分だけは欠かせませんが。

一章 狭間の太陽

出会って間もない仲間を疑うのは容易で些細な事でその溝は深まりそれを修復する事も出来るのだが、事は重要だった。確かに知らなすぎたのは事実。

… かと云って他人の過去を詮索する程子供じゃないし、彼は自分の事を詳しく話す様な性格ではなかったから一緒にいても深くは知らなかった。でも、知らないで済まされる事じゃなかったんだよ… あれ、は。

蒼琳院^{ソウリンイン}を日が昇らぬ内に出発し、時折激しく揺れるが、狭いながらも三人はそれぞれ揺れる馬車の中好きなように過ごしていた。昼と夕刻に食事をする意外は休まず走らせたこともあり、幾分早く次の街である蒼蓮^{ソウレン}に着く。

「あんた達、朱雀^{スザク}に行くならここで降りてもらう事になるよ。この辺は地形が悪いから蒼龍の管轄外の街に行くには徒歩じゃないと駄目なんだ。」

馬車の運転手の男が親切に教えてくれた。

「そうか、ご苦労様。」

「早速、宿を探さないと… 街まで来てるのに野宿しなきゃならないのなんて嫌よ。」

日が暮れてかなり経つのか街は静かで明かりも少ない。サキミヤはそんな心配をしつつ馬車から荷物を降ろす。一方、タクレイアはまだ詳しく、朱雀までの最短距離を聞いている。ノゾミは辺りを見回すが特に変わった様子がない事を確認すると一人街中へと歩き始める。

「あ、ちょっと先に行かないで！タク氏も早くしよう……。」「彼女の止める声が聞こえていないのかノゾミは街の中心部に向かっているし、タクレイアの話はもうしばらくかかりそうだし……サキミヤはなんとか宿が取り一足早く休むことにした。その後、2人も休んでいたがゆつくりもしてられない状況にある為、早朝から朱雀へ向かう三人の姿が森の中にあつた。

「馬車の運転手の話によると、ここから最短で朱雀の中央である朱藍^{アイ}に行く為には森を抜けるのが早いらしい。」

安全ではないが……という注意も加えつつ森に差しかった所でタクレイアは昨晚聞いた事を二人に伝えながらも歩みは緩めない。横に並んでいたサキミヤは確認を取るように

「……ってことは、ここを抜ければ朱藍に着くのね？」

「そういうことだな。……ただ気になる噂がある。」

後もう少しだという事に一安心するのだが、彼の表情は曇ったままだった。その噂がよくないものだという事に気付く。

「噂……って何？」

「面倒な事に宗龍^{ソウリュウ}に動きがあつたらしい。」

宗龍というキーワードに彼女はため息混じりに悪態をつく。

「ボンクラ息子が？」

「……酷い言われ様だな。」

「仲間内じゃそう言ってたもの。昔からの宗龍って形だけで実力じゃ、私達の方が上だったんだから……！」

ノゾミの何げないツツコミについ力説してしまったサキミヤだが、昔はともかく近年の蒼龍の主導権を握っていたのは過激派の方だった。

「ともかく、しばらくは双方の様子を見ないと何かと都合が悪すぎる。」

「思ってた以上に状況が悪いのね。」

タクレイアの言葉にその場は沈んでいた。と言うのも、蒼龍は部族の中でも最大勢力とも言える強い部族で朱雀もそれなりに強い。

だが数が違いすぎるのだ。白虎ヒヤッコや玄武ゲンブに協力をしてもらえるなら互角に戦えるかどうか。黄龍オウリウウが参加してくれるならば勝てるのだが現実的にありえないし、今まで沈黙していた宗龍が動いたとなると自分たちの状況は悪化するばかりであった。

ほとんど人が通らないせいか道と呼べる道がなかった森だが半分程進んだ所で辺りは暗くなり夜を迎えようとしていた。今夜は月が出ていない事もあり暗い森にたき火だけが辺りを照らしており、三人が休める程度の少し開けた場所で 休息と取る事となった。

「明日には着けそう？」

その場所に腰を下ろしてから最初に口を開いたのはサキミヤだった。パチパチと音を立てて燃える火を見ながらタクレイアは 野宿の場所を探す合間に集めて来た薪が少ない事に気付き、その場を立つ。

「だといいがな。…もう少し薪を持って来た方が良いな。サキミヤは残っててくれ。」

「仕方ないな。」

そう言うて特に何も言われなかったノゾミだが、普段のタクレイアの言動から自分にも薪を集めて来て欲しいと言う意図を読み取り彼の後をついていく。

「ん、明日は野宿しなくてよさそう。」

二人が去った後でサキミヤは一息つき、体を伸ばしながら一人暇を持て余していた。一方、薪になる木を探しに来た二人はそれといった会話もなく目的を済まそうとしていた。この暗がりです薪を集めるのは普通の者では正直言っ探にくい、夜目が効くこの2人は一時間程度でその日の分の量を手に持っていた。

「ノゾミ、戻るぞ？」

「…ああ、先に行ってくれ。」

タクレイアの問いかけにノゾミは了承はしたものの戻るどころか更に奥に進もうとしており、彼の行動を不審に思う。意外にも能率優先だということが普段の行動でも現れるのだからこういった用事はさっさと済ませてしまおうタイプなのだが。

「…分かった。」
口ではそう言いつつも彼の行動は気になる。しかし、少し目を離れた隙に慣れた森であるかの様に彼は気配すらも闇に溶けた。

「おい。」

近くにあるもたれやすそうな木に体を預けてノゾミは暗闇に向かつて語りかけた。

「話があるのだろう？」

「そう大した事じゃないわよ。」

暗闇は以外にも返事を返して来た。もちろんそれは暗闇ではなく人であったのだが、月が出ていない鬱蒼とした森の中では誰なのか分からない。しかし、会話をする当事者の二人はそうではないようだ。
「呼び出しておいて、それはないだろう…。」

「じゃあ、重大な事ってことで。」

「……どっちだ。」

親しい会話だった。普段から人と接する態度や言動はそっけなく冷たい印象を受けるノゾミだがその言葉から感情が読み取れるのは彼らしくないと言ったら心外なのかもしれないが…会話は続く。

「そうそう、あの子元気にしてる？」

「変わりない。…お前はそんなことを言いにわざわざ俺を呼んだわけじゃないだろうな？」

「聞いてみただけ。相つ変わらず可愛くない性格してるわね。よくもまゝあの子も耐えられるものね……」

「お前ほどじゃないさ。……用が無いならさっさと帰ったらどうだ。」

素っ気ない返し方は親しくても変わらないようで相手の女性も既に折れた様子だったが、あまりにも厄介払いされる態度に痺れを切らしたのか本題の話に変える。しかし、その声からはさほど真剣さは感じられない。

「ちゃんと用事はあるわ。でも、社交辞令あこしづくらい言えないとね？」

「奴らとの集会でもないのにそんなものは必要ないだろう。」

「……嫌な事思い出させないで。そうねゝはぐらかすほどの事じゃないし。」

「……で？」

「単刀直入に、協力してもらえないかってこと。」

「それを……“また”聞くのか？」

「そうなるけど、あの時は貴方の体面もあつた事だし。」

「あの状況下で話せるとは思ってないからな。というか、俺の方が驚いた。」

「私が過激派にいた事？ それとも永帝エイテイの私が介入した事？」

「……両方、だな。」

その時、彼ら以外の声が会話に参加した。

「永帝！？」

声の主は困惑したタクレイアのものだった。あの後、どうしても気になった為ノゾミの後を追って自分の気配を悟られぬように隠れていた。そこまではよかったが会話の相手の思わぬ発言に思わず声を出していた事に気付いたが、事は遅かった。

「なに？ 撒いて来たんじゃないの？」

「……お前がそれを言うのか？ アイツがいるのを知ってて黙ってたくせに。」

その様子から2人は気付いていたらしく先ほどと変わらない声のト

ーンで話していたがタクレイアは聞ける状態ではなかった。永帝であるという事はレエスという人物であるという事。

それは自分たちとは相容れぬ敵であること。その敵が今日の前にいる　という状況は彼にとって混乱するに値するできごとだった。しかも仲間であるノゾミと親しく話していることがさらに彼の自慢とも呼べる思考力と冷静さをなくす程、混乱に拍車をかけていた。

「1人で来てつてあれほど言ったのに・・・つけられてた貴方が絶対悪い。」

「：否定はしない。が、まさかついて来れるとは思ってなかったからな。」

自信過剰なんじゃないの？などと言いつけている事から、ただの知り合いにしては仲が良すぎる。タクテイアはふとレエスと初めて会ったときの事を思い出していた。

確か部屋から逃げて来た時、彼はいなかった。その時は単に視界が悪いいせいでほぐれたと思っていたが、先の流れからして彼女と会話をしていたのかもしれない。

こんなにも近くに刺客がいたなんて気付かなかった！

「ノゾミ・・・お前は、誰だ？・・・何者なんだ？」

震える声でタクレイアは一番聞きたくないことをあえて言うと、ノゾミは少し渋っていたが覚悟を決めた様に答えた。

「俺、は閃帝センチと呼ばれる妖族・・・現に髪は深紅あかだ。」

髪を結っていた紐を外してその長い髪を垂らすとそれは暗がりに見える鮮血の様な赤。まぎれもなくその存在を証明するものだったが、その髪色は彼によく似合っていた。

「・・・閃帝？・・・う、そ・・・。」

似合いすぎる赤に魅入ってしまったタクレイアだが、いつからいたのかも気付かなかった程に動揺していたのか・・・そこには焚き火の番をしている筈のサキミヤの声で我にかえったが、彼女の様子がいっつもなく異常だった。両肩を強く握りしめており眸は虚ろだ。

呼吸は荒く、小刻みに震えているのに加えて何か喋ってはいるのだが聞き取れたのは始めの方だけで、事象の整理が頭の中でできないでいるせいかずっと何かを呟いている。彼女も突然の事で混乱しているようで呟くのをやめたとも思えば、ヒステリックな甲高い声で叫んでいた。

「　　なんでよお　！？ノゾミの事・・・しっ・・・じんでたのにいい！！」

彼女の生い立ちを詳しく聞いていないタクレイアは何となく察したようだが、情報が処理しきれず走り去るサキミヤをすぐに追いかけられなかった。タクレイアは最悪の出来事に認めたくない・・・信じたくないのが本心だ。

しかし、もう一度ノゾミの顔を見るとその瞳は揺るぎない真実を語っていたがそれでも嘘だと言って欲しい。だからもう一度、聞く様な事をした。

「事実・・・なの、か？」

「・・・ああ。」

ノゾミは確認をした彼に再度、完結的に言葉を繰り返すがタクレイアの「裏切った」というのが不服そうな表情をしていた。確かに裏切りではないが、この状況で閃帝も現れたとなるとかなり辛い。サキミヤは当然ながらタクレイアも相当ショックを受けているその様子を見ていたレエスは微笑みながら自分の言葉を続ける。

「ふふ、じゃあノゾミ？　返事はこの次に”逢えれば”頂戴ね。」意味深な台詞を言うと言を消すレエス。その含みのある言葉にノゾミは違和感を感じるが彼らとの関わりについて考える方を優先し、その場を離れることにした。

今、追うべきはレエスではない事を分かっていたから。しかし、正しい行動をしても結果が良いという保証は何処にもなく後の結末を迎える事となる。

二章 劔と鉾の重ね

漆黒が深まる森は静かにたたずんでいた。時折吹く風が木の葉をざわめかせ、たき火を揺らめかす。それは同じ赤色をしていたけれど、灯は温かく彼はどこまでも冷たいと感じた。両足を抱える形で座り顔を上げるつもりはなかったけど、隣りから自信をなくした様子でいつにもなくか細い声がした。

「・・・サキミヤ。」

未だ心の整理は出来なかったが彼女より幾分はマシであろうタクレイアが声をかけていた。

「まだはつきりと理由を聞いていない・・・もう一度、」

「もう一度、会えて言うの？・・・そんな事できないし、嫌よ！！」

普段はあんなにも明るく振る舞っていたサキミヤだったがこの時ばかりはそうもいかなかった。まして彼女は妖族のこととなると感情的になる癖があり、冷静で居るという方が無理な状況でそれなりに信じていた人物が裏切っていたという事実は重かった。

「私は、あの妖族を・・・閃帝^{センチ}を殺す為に今まで、生きて来たのよ？・・・割り切れるワケ、ない！！」

「分かっているが・・・。」

「わかってない！わかって欲しくもない！！」

慰めて欲しいわけじゃない・・・理解してほしいとも思っただけだった。他人にこの気持ちがかかる筈ないって思ってる・・・タクレイアが正しいってことはわかるけど、心がそれを許さなかったからどうする事も出来なかった。ただ、ただ、声を張り上げて怒鳴る事も溢れる涙も止まらなかった。

森は静かに朝を迎え、薄く光が差し込んでいた。薪は既に燃え尽きそこに温もりはない・・・結局2人は一睡もできないまま朝を迎えていた。

「追つ手は待つてはくれなさそうだ。私達だけで・・・このまま朱雀に向かうか？」

ジツとしていても状況が進展するわけも無く、むしろ悪くなる一方だという現状に考えの末、サキミヤに静かに問いかける。

「・・・感情に流されるかもしれない。けど、このまま逃げるのって性に合つてない・・・と思う。」

「わかった。今なら追いつけるだろう。」

あの後ノゾミがどこにいるのかはわからないが夜の森を抜けるのは通常ならばしない。恐らく彼もこの近辺にいるはずなのは確かだ。

「印^{シルシ}をつけておいて正解だったな。」

「・・・印？何それ。」

サキミヤは武術に神珠^{シンシュ}の力を使っていたからあまり気術の事についてはよく知らない。

「印とは気術師が術の発動時に特定の相手に術をかけた時に用いるものだ。」

「ふーん？あ、そつかタク氏^{タクシ}って両方使えるんだっけ。でもいつの間に？」

「緊急時に備えて蒼琳院^{ソウリンイン}の時にな。さて、日が昇れば彼も動きだすだろう。急ぐぞ？」

「わ、わかった！」

サキミヤとタクレイアは印を頼りにノゾミを探す為に森の奥に歩き出す。

いくらか歩いた所で印に反応があつたのでそれを伝えるところな感じなのかと尋ねられるが感覚的なものなので表現はしにくい。気配を探るのと似ている、とサキミヤに言えば何となく理解したようだ。朝でも薄暗い森の中ではあつたが木々の隙間にノゾミの着ていた赤い衣服が見えた。

「探したぞ、ノゾミ。」

「・・・まだ、何かあるのか。」

「大ありよっ！」

「まず、私に話させてくれ。」

今にも飛びかかる勢いのサキミヤを落ち着かせるためタクレイアは話を切り出す。

「お前の立場を考えれば、責められる立場ではないのは承知の上だが共に旅をして来た間柄なのだから多少話してくれてもよかったのではないか？」

「言葉を返す様だが、お前も同じだ。」

断言したノゾミの言葉にタクレイアは反論出来ないでいた。思い返せば、レエス達と会う時に彼等と同行していたのは偶然だった。一瞬の付き合いで、他部族の間人となれば手の内を明かす訳にも行かなかった。彼が押し黙ったのを確認したノゾミはサキミヤの方をむいて言い放った。

「仇など、子供のすることだ。」

「・・・っ　！！このお　！！」

彼女の癪に障ったようでその手に剣を持ち感情のまま動く。それを見たタクレイアは止めに入る隙もないくらいに彼女の行動は素早く対面して話していたノゾミを捕らえていた。

・・・キイーン。

静寂な森の中に鋼と鋼が擦れ合う甲高い金属音が響き渡る。

「剣を納めなさい。」

聞き慣れない女性の声と止められた刃にサキミヤは戸惑い、固まったままでタクレイアも今の状況が飲みこめずにいた。返答がない事にその女性は気にも留めない様子で再度、丁寧だが棘のある口調で警告を発した。

「納めなさいと言っているのが分からないのですか　？・・・この方を傷つけるならば容赦は致しません。」

強く鋭い琥珀^{コハク}の双眸がサキミヤを貫く。

「・・・あ、・・・あう？」

自分がしようとした事を理解したのか、言葉にならない声をこぼしたサキミヤは力が抜けカラン、と乾いた音と共に剣が手から滑り落ちたその手を見つめる。

「・・・ここで何をしている？」

気まずい空気が流れたが意外にも最初に切り出したのはノゾミだった。

「文を出さずに来てしまい申し訳ありません。事が急を要するものでしたので・・・。」

「そうか、なら・・・。」

「お前たちは知り合いなのか？」

今までの状況を無視した会話が続きそうだったので話をそらすため、親しいと思われる間柄にタクレイアは月並みの質問をすると、その女性・・・漆黒の髪は左側で纏められており髪飾りや服の文様からどこことなくノゾミと似ていた。彼と同年代か、少し年上ぐらいで強い信念の持ち主だという事が先ほどの事からも伺えるが、どうしても他人を寄せ付けけない空気を纏っていた。

「私はフォメル・イージンと申します。以後、御見知りおきを。」

「同じ里の者だ。」

・・・他に言い方があるだろう、と感じたのはそこにいたら誰もが思うだろうが、普段が普段だけに流すしかなかった。彼との付き合いも短いわけでもないでそれなりの対応が出来る2人は無口なノゾミの代わりに詳しい事を聞こうと会話をつなげる。

「妖族はそんなにも外に出るものなのか？」

「・・・好んで外部に出るものは滅多にいません。閃帝センテイである以上は、その責務を果たさなければなりませんので。」

「責務は外に出ないと出来ないのか？」

「一概にそうとは言えませんが、」

「フォメル、余計な事は言うな。・・・急用とは何だ？」

質問をされたフォメルは淡々と答えていくが、ノゾミに止められタクレイアの思惑は早くも無駄に終わる。

「はい。．．．永帝の動きについてはご存知だと思いますが、昏帝コンテイがお会いになりたいそうです。」

「．．．。」

「了承、しますか？」

「．．．．．。」

眉間にしわを寄せて真剣に悩んでいるようでその姿も珍しいのだが、それよりも先の会話の方が気になる。永帝が出て来た事にも驚いたが昏帝と言うのも妖族の長なのだろう。妖族は少数ながら強大な力を持つており無干渉であることから今までその存在を詳細に知る事はなかったので好機に違いない、だからこそタクレイアは微かな期待を胸に抱いていた。

「昏帝も長なのだろう？．．．会わないのか？」

「えっ！？妖族ってそんなに長がいるの？」

「．．．サキミヤ、後で説明をするから、話の腰を折らないでくれ．．．。」

「へ？あ、．．．ごめん。」

妖族を追っているのにも関わらずサキミヤはあまり妖族の部族構成を知らなかった。まあ、赤髪の妖族しか興味が無かったと言えばそうなのだが、初歩的な部分が意外な所で抜けていよるな．．．とタクレイアは思った。

「会ってもいい．．．が。」

変に区切るノゾミにタクレイアは不思議に思った。

「長同士の面会は問題なのか？」

「大アリだな．．．というか。」

「一番、敵にしたいくありませんね．．．。」

どういうわけか、今度は手を額に当ててかなり滅入っているノゾミと昏帝と面識があるフォルメルも相当その人物に会ったのが嫌らしい。妖族同士が敵対している様な噂は最近は聞かなくなったに、だ。ぎこちながらもサキミヤも同じ疑問を抱く。

「会えるって．．．言っくらいだから、争ってるわけじゃないでし

よ。」

「話し合えるならそれにこした事はないだろうに。」

二人の考えはわからない事でもないのだが答えたフォメルは言葉を濁しながら返す。

「確かに仰る通りなのですが、昏帝を知らない貴方達はそう言えるのでしょうか……。」

あのノゾミが苦手とする人がいようとは思っていなかったのもあり、一体どんな人物なのか二人は想像もできなかった。当の本人は昏帝と会うのか否か悩んでいたが、決心がついたのか諦めに近い声を発していた。

「不本意だが……了承するしかない。」

「状況を考慮すればそうなりますね。早急に、との事でしたのお願いします。」

サキミヤはその言葉に忘れていた怒りを思い出した。

「さっきの事まだ終わってない！！このまま逃げるつもり！！？」

「あ？ハナからそんなつもりはない。」

「じゃあ：貴方達と一緒に行動することになるの！！？」

「おい、俺がいつお前等と行動すると言った？元々、利害一致で行動してただけだ。」

「うつ。」

事実を述べられてそんな事はないと答えようとしていたが、矛盾した想いに少々困りながらもやはり反論は出来ないサキミヤに助け舟がでた。

「私の個人的な見解だがこの際、戦力は多い方がいい。私達も昏帝には会えないのか？」

タクレイアの問いにフォメルは淡々と答える。

「一般的に族長にお会いになるのは紹介が必要です。」

そうか……と肩を落とした。タクレイアは少なからずも戦力にしたいのだろう、すぐに他の手だてを考えているのか黙ってしまう。そんな彼を見たノゾミは提案を持ちかける。

「・・・会いたいのなら付いてくればいい。会えるかどうかは・・・お前達次第だな。」

横目でタクレイアを見ながらノゾミは言った

二章 劔と鉾の重ね（後書き）

新キャラ登場です。

ちなみに彼女はお気に入りキャラだったりします。

三章 繋がれた楔

陽は昇って間もない頃、蒼龍族管轄区と朱雀族管轄区をまたぐ森を抜けたノゾミとタクレイア、サキミヤ、新しく加わった妖族のフォルの4人。まずは近くの朱雀族管轄区の街である朱夏^{シュカ}まで行き休憩と補給をしてから昏帝^{コンテイ}のもとへ向かう事になった。

「それにしてもその色は目立つな。」

「確かに。それって妖族の長だけだったっけ？」

脈絡のない言葉がタクレイアから発せられればそれに続きサキミヤも頷く。

「言伝えによれば、帝^{みかど}・・・王の証と言われてます、が・・・！こ、このままでは他部族の集まる所へはいけませんね。」

一般には知れない情報を丁寧に返してくれるフォルだったがノゾミに睨まれ話を切り替える。

「少し待て、術をかけてくる。」

そう言って三人の傍から離れて茂みの向こうへ消えるノゾミの気配が薄くなった所でタクレイアは疑問があつたのでこの機会に答えてくれそうなフォルに聞く事にした。

「ところで貴女はなぜこのような場所へ？」

「タク氏？そんなの伝言を伝えにじゃないの。」

タクレイアの質問の意図が分からずサキミヤは先ほど聞いた伝言ではないかとフォルの顔を見るが視線を反らしてバツの悪そうな表情だった。

「・・・。」

「答えたくないのなら勝手に推測をする事になるが・・・。」

タクレイアの質問に答えないフォル。サキミヤが言ったような建前でも言えいいものを答えないのは、なにかしら都合の悪い事があると言っているも同然だ。それが根本的に素直な性格なのかもしれない。「まあ、さっきの事は忘れてほしい。少し警戒をしすぎ

た。」

「警戒　？つて・・・ああそう言う事ね。まゝタク氏らしいって言えばそうなのかも。」

「サキミヤ・・・警戒の意識が低いのも問題だと思うが。」

「・・・気をつける。」

警戒すべき相手・・・とするならば妖族はそれに値するのだが、今は彼等よりも蒼龍部族の過激派の軍を　警戒した方が、今は最善である。協力・・・とまでは行かないが話し合える状態ではあるのだから　下手に藪を突つつくものでもない。歴然とした力の差があるのは分かっている。　などとむくれたサキミヤの隣でタクレイアは思っても見るものの謎が多い妖族を警戒せざるを得ない。

「それもあるが、妖族の里にたどり着いたものはい無いと文献には書いてあった。　我々では行使できない術でもあるのか？」

生物学的に言えば全て同じ種族なのだが太古に交わした神獣の違いにより部族は別れ、暮らして来たが　妖族が異なる種族の様に扱われて来たのには契約が大きく関わって来ている。そもそも妖族が契約できる神珠はあやかし。つまりは神格のない力を持つ獣を従わせる事ができる。

今の世界は四神五聖獣が納めているがそれ以前は違ったと言い伝えられている事から妖族とは古に君臨した神の名残なのである。その事から言えば一番古くから神珠を行使して来た部族なのである。

それゆえ、妖族独自の術が在ってもおかしくはないのだが。

がさり、と草木が揺れる音がした方を見ればノゾミが髪色アカを深紅から赤錆色へと抑えた色にかえて戻ってくると話を少し聞いていたのかタクレイアの問いかけに答える。

「それについては、黙秘・・・としたいが。」

「別に他の人へ言われても使えないので問題ありませんし、ね。

不思議に思われませんでしたか　？どうして妖族は滅びないのかと。」

ノゾミの言葉を繋ぐ様にフォメルが続けて話す。

「少数でありながら持つ神珠の力は上位だと言うのもありますが、我々が里としている土地がここより離れた場所にあり外部から介入を遮断しているからです。その分違う危険もある訳ですが・・・。」

歯切れの悪い終わり方だったが必要はそう言う事らしい。それを聞いて納得した様にタクレイアは頷く。

「外部の介入を遮断・・・と言う事は行き方が問題だった訳か。」
「それって契約とにてる？」

「そうですね。神獣と人間の住まう空間は異なりますが里はそこまでしてしまうと完全に行き来ができなくなってしまうので厳密に言うとは違いますが、そう考えてもらってもかまいません。」

「それぞれの里の者はその鍵を持っている。・・・この様に宝石に刻んでいる。」

そう取り出したのはノゾミの腰の下げていた刀を取り出し、柄の部分に付いた飾りを2人に見せる。飾りとしてはシンプルなものだ。紐通しの穴が中央に開いているくらいで特に変わった事はない様に思えるが角度が変わった時にだけ見える様に文字が刻まれていた。

「隠文字・・・この文字の意味がある訳か。」

「文字の意味？ 閃って読むのよね？この文字。」

「はい、各部族によつて里がある空間が異なるためこの文字は変わります。交流がある人ならばその里ごとの鍵を持っていたりしますね。」

「外からの侵入は困難だが中からは容易い、とう事か・・・なるほど、先の戦乱はそれであんなに早くから族長が先頭にいたのか。」

ただ妖族の里に行くだけの話だったが以前から疑問に思っていた事が解決した事を思わず口にしていた。その瞬間、何とも言い難い感じがこちない空気が流れる。当事者の同族であるノゾミとフォメル、そしてサキミヤは先の戦乱の中でなにかしらあった事を思い出すタクレイア。

「・・・失言だったのなら詫びよう。以前に見た記録で疑問に思う所があつてだな・・・それはともかく、その鍵があればどこか

らでも里に行けるものなのか？」

話題を元に戻したがフオメルとサキミヤは依然沈んだままだったが、平然としているノゾミが答える。「・・・場所、だったな。鍵

さえあれば問題ないが文の返事が来ていない。返事がなければ行っても追い返されるだけだ。」

「追い返されちゃうの？」

ここでサキミヤが元に戻ったのか会話に入ってくるがその疑問は当然のものだ。交流があるならば多少の融通は聞いてもいいはず。

「それについては族長同士で決めた事なのです。その、戦乱の発端が文なしで里に訪れた事により起こったもので・・・。幾ら仲が良くても文の返事を待たずして入った場合、攻撃されても文句は言えないのです。」

「なら、文が返ってくるまでは動けないという事か。昨晚はあまり休めていないので休憩しても？」

そう言えば永帝エイテイのレエスが昨晩来てからまともに休んでいない事に気が付く。

「そうだな・・・。」この時にもっと急いでいれば・・・と後悔をする事になるとは思ってもなかった。朝の清々しい空気に雲が流れる影が太陽を遮り陰をつくれればひんやりとする風に不穏な空気が混じっていた。それは静かに確実に彼等に近づいていた。

四章 僅かな闇に射す灯火

四章：僅かな闇に射す灯火

昏帝^{コンテイ}に出した文の返事が返ってくるまで休憩する事になったがすぐに休める場所があるはずがなく、日が真上に差し掛かった頃によく旅人や商人が使っている簡易的な休憩所までたどり着く。位置的には朱雀族管轄区の朱夏^{シュカ}まで馬車で半日程の所だった。

「ここで待つてもいいけど、朱夏に行くって手もあるんじゃない？」
どうせ待つているだけのなら宿で休んだ方が疲れも取れるし、首都の朱紅^{シュコウ}に近づくので一石二鳥じゃないの、とサキミヤは考えていたが他のメンバーはそうでもないらしい。

「いや、ここで待つている方がいい。あまり人の多い場所で動かずにいると追っ手に感づかれる可能性が出てくる。」

「・・・それにあまり聞かれたくない内容の話が多いからな。」

タクレイアとノゾミがそう言えばサキミヤは反論するまでもなく納得したのか、話を変えて今のうちに疑問を解決する事にした。

「タク氏、前に妖族の族長が複数いるって言ってたよね？」

「ん？ああ、その話か・・・私は文献を読んで知っていたのだが、今思えば一般常識ではなかったな。」

「え、じゃあ知らない方が普通だったの？！」と、昨晚森で話の方向が違う方に行きそうだったので説明を後ですと言っていたのを思い出すタクレイアだったが思い違いをしていたようだ。

「・・・何の話ですか？」

「帝^{みかど}が複数いることだ。案外、知られてないようだな。」

「他人事の様に聞こえるがノゾミは当事者だろう？」今更だが深紅^{アカ}の髪を持つ閃帝^{センテイ}であるノゾミだったがその物言いは自覚がないのか気にしてないのか、のどちらかだが彼の場合明らかに後者だろう。傍にいるフォルメルも何か言いたそうな視線をノゾミに向けている辺り間違いない。話が進まないと感じたのかサキミヤが続きを

促す。

「それで、何人族長がいるの？」

「私が読んだ文献によれば分かっているのは5人。詳しく言えば
閃帝 火を操る妖魔と契約した者。その髪は燃^もえる赤らしい。
永帝 水を操る妖魔と契約した者。その髪は凍^こえる青らしい。
昏帝 金を操る妖魔と契約した者。その髪は煌^{きら}めく金らしい。
命帝 木を操る妖魔と契約した者。その髪は芽^め吹く緑らしい。
暗帝 土を操る妖魔と契約した者。その髪は透^{すき}通る銀らしい。
と言う様にそれぞれ契約している神朱の属性が特徴的な色を表しているようだな。」

「・・・幻術で誤摩化せば俺の様にできるが外に出るの方が稀だ。
その文献、タイトルは？」

「いや、これが表紙と背表紙の劣化が酷くてな・・・中が辛うじて読める程度で筆者も分かっていない。」

やけに食いつくノゾミが珍しく誤摩化したタクレイアだったが本の劣化が酷いのは事実だった。作者名は中に書かれていたので分かっていたがそれを今言うのはなぜか躊躇ってしまった。今から訂正するのもおかしいので黙っている事にした。

「他にも書いてあったようだがそこまで読み込んでいなくてな・・・サキミヤは理解できたか？」

「うん。属性ごとに1人族長がいるなんて・・・ちょっと変わってるっていうか変な感力ンジ。という事は、ノゾミは火属性ってこと？」

「まあ、そうなるな。」

そこでタクレイアは髪色が属性の色と関係している事に気が付く。

「永帝^{エイテイ}であるレエスは氷・・・水属性になるな。・・・先の戦乱、まさかレエスとノゾミではないよな？」

「それは、違います！」
「・・・・・・・・。」

ノゾミが否定するかと思えばこれまで控えめに佇んでいたフォメル

が声を上げた事で一同は沈黙する。 「まず、年が合わないだろう。」

「そうよねっ ! 確かに30代にはいつてた感じだし !」

「………。」
「サキミヤがノゾミに同意する様に言っただがまた沈黙が流れる。」

「……先代が起こした戦乱、蒼紅ソウコウの乱と呼ばれているのでしたね。」

「その後俺が引継いだからな。……先代については俺も詳しくない。」

「…… ? 引き継ぎとかあるのではないのか。」

「フォメルが沈黙を破り戦乱を起こしたのが先代の閃帝である事を伝えたがその先代とノゾミに接点がないはずはなく、タクレイアは不思議に思う。」

「俺が引継いだのは神珠シンシュが主なしの状態だった。」

「それって、死んだからって事 ?」

「私も同席していませんがそう聞いてます。」

「……この話はあまりしたくない、日は高いが休んだらどうだ ?」

「珍しくノゾミがやんわりと話を切ってくる。話したくない事は誰でもあるだろう……長をやっていたら必然と隠したくなる事は多い。タクレイアも」

「長く話すぎたな、いい加減休むでしょう。」

「では、私が見張りを致します。皆さんお疲れでしょう ?」

途中から合流したフォメルが見張りを買って出たのでそれに甘えて他の三人は休む体制になる。やはり緊張したまま過ごした所為かすぐに寝入ってしまう2人を横目に腰だけ下ろしたノゾミがフォメルに話しかける。

「……すぐに帰れ。」

「そんな事をすれば私が姉様に怒られてしまいます。事が終わるまで同行致します。」

フォメルの返答に眉間にしわを寄せてしばらく黙っていたが

「・・・勝手にしろ。」

とだけ言々とノゾミも休むため温かい草の上に体を預けるのをフォメルは見届けると

「はい、勝手に致します。」

と、表情を崩して答えた。

それからしばらくして見張りをしていたフォメルの元に文が届き、その内容を確認する。

「・・・外庭に呼ばれましたか・・・他部族がいるなら当然でしょうけど、どうしてわかったのでしょうか？」

そうなのだ。同行者がいるとだけしか文には書いていなかったのだがそれが他部族である確率の方が少ないのに内庭ではなく、外庭に呼ばれた・・・警戒しておいた方がいいのかもしれない。

それこそありえないが永帝の手回しがあるかもしれないと密かに思うフォメル。少しづつかわる状況に不安を隠せなかったが不穏な風は温かな日差しと揺れる木の葉の音にかき消されてその影を見落としてしまっていた。

五章 揺らぐ“証”

寝入ったサキミヤだったが少しして目を覚ませば近くでタクレイアとノゾミが休んでいるのが視界に入り少し離れた場所なきなたでフォメルが周囲に気をつかいながらも彼女の武器である長刀の手入れをしていた。サキミヤは昨日の感情を整理しようと空を、流れる雲を眺める。

赤い髪の妖族を探す為に妖族を敵視している蒼龍族の軍に入隊したまでは良かったのだが、数年は何も変化のないまま過ごす事となった。諜報部に正式に配属されてからは任務の合間に聞き込みをしたがそれもあまりいい情報があったとは言えなかった。そして、先日ノゾミ出会う。そこからはこれまで変化がなかった事が嘘の様にがらり変わる。

まずは、蒼龍軍の過激派のトップであったコウセン代表が殺された事。確かに野心家で人柄のいい人物ではなかったが宗家の者達のように地位にものを言わせた事はしなかったし、いい意味で実力主義だったから不満はないとは言えないが反発するほどでもなかった。そのコウセン代表を殺したのが永帝エイテイのレエスと言う女性。圧倒的な実力差に恐怖を感じたし、邪魔するなら排除するとか言ってたからこれから命を狙われるに違いない。一緒にいたのはタク氏と呼んでいた朱雀族スザクの族長だったし。

そして、一番問題なのがノゾミ。私が仇として探していた赤い髪の妖族である閃帝センテイだったのだから。確かに仲間とか言う括りで私は見ていたけど彼はそうでもなかったようだけど、そこまで冷たい感じがしなかったから余計にショックが大きかった。聞いたときはパニックで斬り掛かってしまったけどあの時はフォメルという妖族の人がいてよかった。

・・・多分返り討ちに合ってたと思うけど。今は逆に落ち着いてい
ると言うかあの時の怒りが嘘みたい沈んでる。 結局の所そこま

で復讐したいとか思ってた事。確かに当時は思ってたかもしれないけど、なにか目標がないとどうしたらいいの不安だったんだと思う。今も、それ意外の目標とか信念とか無くなってしまっ
って自分を保つ為の建前なんだと感じる。

今更だし、当分はこのまま保留しておいても蒼龍軍に追われている状況が変わる事もないだろうし・・・ひとまず落ち着くまでは周りの流れに乗るしかないよね、そう結論を出したサキミヤは瞼を閉じそのまま休んだ。

その様子を見ていた人物がいた。正確には気配で寝たのかどうかを知っただけなのだが。

「・・・やっと、休まりましたか。気が乱れていたので不安でしたが・・・。」

その人物とは見張りをしていたフォメルだった。彼女は気配を読むのに優れており悪意であれば2〜3km離れていても気が付くくらいだ。まあ、浮き沈みの激しいサキミヤの場合そうでなくても観察力のあるものならば分かってしまうかもしれないが。

「・・・少し、遅めに起こす事にしましょうか。」

そう言っ
て長刀の手入れを終えたフォメルは先ほどサキミヤが見ていた雲を見上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6519m/>

トラベジウム

2010年10月9日15時52分発行